

国際関係学科設立 50 周年記念シンポジウム

われわれの課題と展望

「本学における国際関係学の展開」

「国際関係学科の展望―地域から見た国際関係―」

報告書



津田塾大学

学芸学部

国際関係学科

目次

第一部 1

第二部 19

第1部

学科創設に関わってこられた先生方からのリリーススピーチ

本学における国際関係学の展開

長沼 秀世（津田塾大学名誉教授）

東 寿太郎（津田塾大学名誉教授）

小倉 充夫（津田塾大学名誉教授）

林 哲（津田塾大学名誉教授）

加納 弘勝（津田塾大学名誉教授）

百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）

●パネリストの紹介

長沼 秀世 NAGANUMA Hideyo

津田塾大学名誉教授。アメリカ社会経済史。2005 年 3 月退職。著書『アメリカの社会運動—CIO 史の研究』（彩流社、2004 年）他。

東 寿太郎 HIGASHI Jutaro

津田塾大学名誉教授。国際法。2000 年 3 月退職。『国際社会における法と裁判』（国際書院、2014 年）他。

小倉 充夫 OGURA Mitsuo

津田塾大学名誉教授。国際社会学・アフリカ研究。2013 年 3 月退職。『解放と暴力—植民地支配とアフリカの現在』（船田クラーク・センサヤカ氏との共著）（東京大学出版会、2018 年）他。

林 哲 LIM Chol

津田塾大学名誉教授。東アジア国際関係史・近現代朝鮮史。2013 年 3 月退職。共訳『朝鮮戦争の起源』（ブルース・カミングス著、明石書店、2012 年）他。

加納 弘勝 KANO Hiromasa

津田塾大学名誉教授。社会学・中東研究。2014 年 3 月退職。『世界のピース・地域の織物—人々の願いとアイデンティティ』（文化書房博文社、2011 年）他。

百瀬 宏 MOMOSE Hiroshi

津田塾大学名誉教授。国際関係史・フィンランド研究。2000 年 3 月退職。『国際関係学原論』（岩波書店、2003 年）他。

—第 1 部では、国際関係学科開設当時の状況や、開設後のカリキュラムの変遷を通じて、この学科の特徴がどのように形成されたのか、そして、その意義がどのような点にあるのかという、主にこの 2 点に関して、先生方から語っていただきたいと思っております。

—まずお話しされるのは、長沼秀世先生です。国際関係学科開設当時の状況についてお話しいただきます。

英文学科が国際関係学科の足掛けに

長沼 実は私は、国際関係学科ができる 3 年前の 1966 年 4 月に、英文学科のアメリカ研究コースの科目を担当するということで着任いたしました。文学、語学ではないアメリカ研究、しかももう一つ、イギリス研究が設置されたことは、ある意味では画期的なことであり、また、国際関係学科ができる前触れになったのではないかと思います。

そのきっかけは、4 代目学長の藤田たき先生で、社会科学系の方です。労働省の婦人少年局長を、津田塾大学の学長になる前にされていました。おそらく藤田先生のイニシアティブで英文学科の幅を広げるという意味で、アメリカ研究、イギリス研究というコースを設けたのだと思います。

学科設立が発案されたきっかけ

津田塾大学の教授会は、学長が司会を兼ねるシステムですが、藤田先生が教授会を「将来構想懇談会」という名前に切り替えて、フリートーキングでもよいから津田塾大学の将来のことを色々と考えてほしいと提案されました。その中で、新学科の構想というものが出来てきて、当初は、学科の名前もなかなか決まらなかったのです。色々な意見が出てきまし

たけども、最終的には国際関係学科を設立しようということになりました。



長沼秀世先生

カリキュラム構想に携わった先生方

学科設立は、ある程度何年か準備期間が必要です。おそらく 1967 年ですが、井門富二夫先生が津田塾大学に着任されて、具体的なカリキュラム構想、そして人事の構想にも関わっていたのではないかと思います。井門先生は、私が着任する前から、非常勤で津田塾大学に来ていましたし、文部省にも関わっていました。カリキュラムという問題に関しても、かなり詳しい方でした。事実、大学のカリキュラムに関する専門的な著書もございます。

井門先生が中心となり、ほとんど 1 人で、学内外の方と相談されてカリキュラムをつくられたと思います。その当時、河野正通先生という学外にもお顔の広い方がいらっしゃいまして、井門先生が河野先生のサジェスチョンを受けながら、学科のカリキュラムなどを考えられたと思います。

国際関係学科ができてから

1967 年、1968 年と、学科の構成が色々と考えられて、1969 年 4 月から学科が発足いたしました。最初は、新しい学科をつくっても、いきなり 1 年

次から4年次までいるわけではなくて、当初は1年次だけです。そのため、英文学科の3、4年次を対象に、臨時的ですけども、国際関係コースを設けて、国際関係学科のある程度の勉強ができるようにしていました。

当初学科をつくったときには、1年生がどのくらい来るのか分からないわけです。そのため、英文学科と国際関係学科、共通の形で入学試験をやったような気がいたします。社会科学系の教員があまりいなかったこともあり、文科系にしては珍しいですが、社会科の試験はなくて、その代わり、英語、数学、国語という3科目で試験をしていました。

社会科の試験をするようになったのは、国際関係学科がある程度出来上がり、スタッフもある程度そろって、入学試験の問題を作れる状態になってからです。

1969年に学科が発足したのですが、私は実は1969年秋から、留学させていただきました。当時津田塾大学には留学制度はなかったので、大変ご迷惑をお掛けしたのではないかと思います。1971年4月から再び津田塾大学に戻りました。

1970年に東寿太郎先生、許世楷先生、そして藤村瞬一先生がお見えになりました。当初は学生数も少なく、教員も多くはなかったので、大変ぜいたくな授業をしました。特に4年次の総合ゼミは、教員が2人参加し、卒業論文も2人の教員が審査に加わりました。口述試験に関しても、ぜいたくでした。しかし、学生数が増え、教員の数も増え、なかなかそれがうまくいかなくなり、4年次のゼミも、卒業論文も各先生が審査することになりました。

現在のカリキュラムへ通ずる道のり

国際関係学科ができた当初、カリキュラムが必ずしも確定していませんでした。井門先生の一種の理

想論的なカリキュラムと現実とを、どうやって擦り合わせるかで多少問題がありました。

井門先生のプランで、国際関係学科ができたときにフランス語を第一外国語とするコースができました。意欲のある学生が当初から2桁の人数であり、優秀な学生が出てきたのですが、そのフランス語を第一外国語として科目をそろえます。当然、英語を第一外国語とする学生も、第二外国語としてもフランス語を多くとります。そういう意味で、フランス語の先生は何人もおられましたが、いろいろ問題ができました。10年近くは頑張りましたが、学生の考え方も変わってきたのか、フランス語を第1希望とする人数が1桁になりました。これは仕方がないということで、フランス語コースを廃止することになりました。

次に英語を国際関係学科の学生にどのように確保するかという問題もありました。国際関係学科は、井門先生のご尽力で、1つの学科としては珍しく、英語科と社会科の2つの教員免許が取れます。英語科の教員免許を取る学生のほうが多いですが、そのためには、第一外国語ではなく専門科目としての英語を、当時の規則では32単位以上取らなくてはならなかったのです。

今と違って、外国語の科目というのは、1コマ2単位しか取れないのです。これは結構大変なことなのですが、国際関係学科の英語の習得を英文学科並みにしていただくためには、英文学科の先生に非常にご努力いただかなくてはなりません。

特に2年次において、英語を国際関係学科にも必修にするにはどうしたらよいかを、私と当時の主任の岡部廣治先生が、何度も英文学科と交渉しました。国際関係学科の2年次の英語を必修にする、つまり1年次と2年次と4コマずつ英語の単位を取るということは、当時の基準では大変ぜいたくなこ

とです。文部省の基準では、第一外国語、第二外国語を合わせて 16 単位でよかったのですが、津田塾大学では 1 コマ 2 単位の計算で、第一外国語、第二外国語を合わせて 24 単位以上取るとしました。英文学科の先生のご協力を得て、国際関係学科の学生も 2 年次まで必ず英語の単位を取ることにしたのです。

さて、カリキュラムが安定するまでには、10 年ぐらいかかったような気がします。最初に置かれた基本科目として、国際関係概論、比較文化序説、それから地域研究序説がありますが、その在り方を巡って、激しい議論がありました。国際関係学科の原論といえますか、概論は一本であるべきだと強い主張をなさる先生がいました。具体的に言うと、国際関係概論と比較文化序説の 2 つを、どのようにまとめるかという議論でした。そして国際関係概論 A、国際関係概論 B になりましたが、その後、また元へ戻ったということがありました。

次にコース制の設置ですが、学生の自由な選択に任せるという当初のやりかたは、学生の自主性という点からは望ましいことなのですが、現実には、科目選択においてよく分からない学生も相当います。そこで学科ができて 5～6 年たったころ、カリキュラムをもう少し分かりやすい方向に変えなければならないということになり、コース制にして、コースごとに基礎科目、専門科目、選択科目などを設定することになりました。私が委員長となって原案を作り、国際法・国際政治コース、国際経済コース、地域研究コース、比較文化コースの、4 つのコースを設けました。ただ、津田塾大学の伝統で、柔軟に、他のコースの科目でも自由に取れるという方法にいたしました。

選択科目としては、津田塾大学で重視される地域研究の科目を充実させる。例えば私はアメリカ経済を担当しましたが、アメリカ政治、アメリカ文化、アメリカ社会なども入れる。イギリス、ドイツ、フランスなども同様にする。つまり、既存の学問分野で研究者が多い科目は国別で行いました。研究者が少ない部門、例えば北欧研究や東欧研究、ロシアは東欧・ロシア研究とまとめたかもしれません。東アジア研究、南アジア研究、という名前にしたか……このような科目をたくさん設定しました。

その年度で、どれくらいの先生にお願いできるかという問題もありましたので、毎年全科目が開講されたわけではありません。しかし、地域研究科目は、世界各地域にわたり設定し、もちろんラテンアメリカ研究も設定しました。

一長沼先生、ありがとうございました。学科設立までの努力や、開設されてからの葛藤がよく分かりました。

一次にお話しいただくのは、東寿太郎先生です。東先生はご専門の国際法の立場から、国際関係との関連についてお話をされます。

東 今紹介いただきましたように、私は国際法の立場から国際関係学をどう見るか、あるいは国際法が国際関係学の中でどういう役割を果たすかということについて、お話しすることになっています。

津田塾大学に赴任したきっかけ

ここへ来て 30 年間、教員として務めることができたのは、やはり色々な偶然のたまものでした。まず、津田塾大学に来ることになったのは、私が前に勤めていた神奈川大学法学部で、1967 年～68 年、

この1年余フランスへ留学させてもらうことがありました。帰ってきましたら、学園紛争真最中で、授業は妨害されました。せっかく留学させてもらい、色々と資料を持ち帰っているのに、この調子では勉強は全然できない。ここにいても仕方がないということで、辞めました。それが1969年3月なのです。



東寿太郎先生

2か月経った5月、学会で横田喜三郎先生が「おい、東君。君、神奈川大学辞めたのだった？」と言うものですから、「はあ、辞めました。何も勉強できないものですから」「ああ、そうか。それじゃあ、俺に考えがあるから」とおっしゃいました。横田先生は津田塾大学の理事で、国際関係学科に国際法がないことをご存じですから、私を紹介しようとお考えになったのだと思います。

当時の国際関係学科における課題

法律の研究書、著書が図書館にたくさんないと、勉強ができない。ところが津田塾大学には、法律関係の本はもちろん、国際法の本など全くゼロなのです。一橋大学の法学部からここへ『法学概論』を講義しに来る人がいましたから、その講義を聞く学生のために若干法学の入門書が置いてありました。

井門富二夫先生が、当時学科主任だったのですが、秋に「主任をお前がやれ」と言われ、学科主任を

引き受けたのです。新しい学問の分野について、学生に勉強してもらうためには、国際関係や国際法という狭い分野の本を読むだけでなく、広い分野の哲学から文学から、そういう本も読んでもらうという趣旨があり、1年生もゼミを始めることになりました。

当時の学生たちとのエピソード

1年生のゼミを始めるとき、「津田塾大学に入ってきて、これから皆さんはどういう勉強をするつもりですか」と聞きましたら、そのときの何人かの学生が「大学へ入ったのだから勉強します」と答え、これには大変驚きました。私は、受験勉強から離れて大いに大学生活を楽しもうと思ったのですが、大学生活を楽しむことの中には、勉強するのは入っていなかったのです。

1年が経って、3年ゼミの学生が9月の末に「今年で退学します。来年外務省の外交官試験を受けるつもりで、試験場の空気を経験しておこうと今年受けたところ合格しました。来年受かるかどうか分からないから退学します」と言うのです。なぜ試験に受かることができたのかと聞くと、法学概論で、日本国憲法という国際法の試験があるのですが、「外務省の試験では、日本国憲法で先生が話したことを、そのまま書けばよかった」とのことでした。国際法に至っては、今でも覚えているのですが、「海洋自由原則の成立過程」という問題が出たとのこと。「これは、つい4～5か月前の期末試験のときに答案を書きましたから、楽々と書けました」。

結局、大学をやめて外務省へ行ったのですが、学生諸君の答案を見ても、法学など全然やっていない人たちが立派な法学の答案を書きます。驚いたのは、「法学概論」の授業のときに、「マイクを先生の机の前に置かせてください」「ノートを取るのに忙しいから、マイク（録音）でやりたい」と言ったのです。学

生が極めて勉強熱心で才能があるということを見まして、これは簡単には津田塾大学から引き下がるわけにいかないと感じていました。

大事な役目にも携わるように

2～3 年経って、国際関係学科のカリキュラムの作成などにも参画するようになり、大学院が始まりますと、ますます責任が重くなってまいりました。5 年経って、英文学が専攻の中島文雄先生が学長になられたのですが、そのときに、監事の河野正通先生が定年の年で、私が代わりになりました。

理事会から直接選ばれた監事ではなく、学長が指名する学長補佐ということで、監事の仕事を引き受けました。監事というのは、学長を助けて財務の筆頭をつかさどるという役職でした。

大学の図書館を充実させるために

文部省の学校法人運営調査委員会という委員会がやってきまして、「津田塾大学のことを色々調べたが、図書費を各教員に配分していないではないか」と。ルールによれば、その当時 20 数万円の図書費を専任教員に配分しなくてはならないことになっているが、「なぜそうしないのか」とのことでした。「我々の大学では、図書費に制限をかけたのでは十分な図書を図書館に用意することはできない。だから買いたい人には自由に買ってもらう。その代わり、買わない人は予算に満たなくてもそのまま図書費として計上しておく。」と答えました。

2～3 週間経ちまして、文部省から正式な文書で、図書費を各専任教員に割り当てるよう言われましたが、図書の充実が先立ちますから、それまでのやり方を続けました。ここにいらっしゃる百瀬宏先生は、毎年ありがたいことに百数十万円の図書を図書館に購入していただきました。何しろ歴史のない国際関

係学科ですから、図書は絶対的に不足しているわけです。専門の図書をどんどん買ってくださいる教師は、非常に有難いことだったのです。

私は国際関係学科あるいは津田塾大学の発展のために尽くすことはできましたけれども、はて、この国際関係学の発展のためにどれだけ尽くしたのでしょうか。

津田塾大学にて実感したこと

今、百瀬先生の話をもう一つ出しますけれども、百瀬先生の『国際関係学』という文献では、「国際政治といっても、国際関係学の文脈で語られる限り、いわゆる国際政治だけでなく、国内政治との両面にわたる把握が本来意図されているのであり、それは国際法や国際経済についても同様である」と。私は、本当にそうだと、この国際関係学科に来て経験してきたのです。

色々な偶然が、私にとっては大変な幸運が、重なりました。

—先生のご専門から本学にまつわるエピソードがとても印象的でした。

一次にお話しされるのは、小倉充夫先生です。小倉先生は、本学で初めて開講された、国際社会学の検証に尽力されました。

小倉 私は、立って話させていただきます。久しぶりにこの教室が懐かしいのです、こうやって講義をしていたものですから。

私は 1972 年に、非常勤としてここに来ました。1973 年に専任になり、1990 年まで 17 年間専任として、そして、少しお休みがあり、その間も非常勤として、その後また 17 年、退職まで勤めました。

つまり 17 年/17 年と、2 つの時期があります。今日は、この前半の 17 年を主にお話しさせていただこうと思います。



小倉充夫先生

この 17 年というのは、実は給料を頂きながら、勉強させていただいていたのです。卒業生、大学院を出られた方も何人かおいでになっておられると思いますが、そういう方たちは、私が若いときの頼りない教師であったころをよくご存じだと思います。そういう教師が 17 年間いて、どのように学んでいったのか。恐らくそれは、この学部の学生等が学んでいくことと、非常に似通っていました。学部の学生たちがもう既に学んでいるか、あるいは学ぶ必要があることと重なると思うのです。

自身が学問的関心をもつ領域

大学紛争で授業はなかったのですが、一応大学院を形ばかりは出てまいりました。3 つほどの分野について、関心があり勉強してきたのです。

一つ目はヴェーバーの社会学、特に支配の社会学と宗教社会学でした。

二つ目は、当時、構造機能主義や近代化論が有力で、私も何となくそういうことを勉強しなくては行けないと思ったことがあり、比較政治学という分野について関心がありました。ですから、この大学のゼミに

比較政治社会学論というタイトルを付けたことがあったと思います。私の先生も、お一人は農村社会学の大家でしたが、もう一人は政治社会学の先生でした。

三つ目、これは私にとっては幸いしたのですが、アフリカの政治変動、あるいは開発に関心がありました。ヴェーバー社会学や比較政治論は一国的に考える傾向が強く、関係性の視点が稀薄でした。このことに気づかされたのがアフリカ研究でした。この 3 つに関心があって、この大学に偶然来ることができた。高い理想というか、主体的な選択ではなかったのですが、さて来てみると、大変なところに来たと、良い意味で思いました。

「腑に落ちる」ということの重要さ

先ほど申し上げたような分野は、比較論なのです。やはり関係という部分が非常に欠けている、そのような欠点というか、特徴があったわけです。いまさら国際的な関係性は非常に重要だと言うと、当たり前ではないかと皆さんに笑われるかと思います。当たり前のことを、言葉は知っていても、本当に腑に落ちるというか、自分のものになるということは、やはり少し違うのですね。

ですから私は、世界史的条件、あるいは歴史発展の国際的契機、それが本当に自分にとって、自分の考え方に腑に落ちる形で理解できていくというのは、まさにこの大学に来てからでした。

自分にとっての位置付けや表現のしかた

そのような中で考えていったときに、確か 1990 年だったか、百瀬宏先生が『国際関係学』という本をお出しになって、その中に、社会の問題を国際関係の中で問い直すとありました。それまでは、自分の視点

や方法の特徴をどのように表現するかということは、なかなか難しかったのです。

「国際社会学」という言葉が先ほどから随分出てきましたけれど、国際社会や地球社会、あるいは人の移動と定住などトランスナショナルな現象を実質的な内容とすることは多いと思うのですが、私には、国際社会学という名称には違和感があり、その名称を使うことをずっと逡巡していたのです。

社会学の問題は、従来からいわれているように、一国的な視点が濃厚であることでした。それを国際関係学から批判的に問い直していく、つまり農村にしろ、都市にしろ、家族にしろ、およそ社会学の対象とされてきた事象を国際的関係性の視点を踏まえて考える。国際社会学は社会学の中の一分野というのではなく、そもそも国際関係学的な視点で、社会の問題を捉えていくことなのです。そういう意味で国際社会学という名称を使うようになりました。

しかし今でも、あなたの専門は何ですかと聞かれると、困ります。大事なことは、どのようなことを今研究テーマとしているか、どのような問題関心と視点から、あるいは何にこだわってやっているかが実は重要で、それに沿って色々なディシプリンを勉強していくことだと思います。

それは皆さんもそうなのです。だから自分の関心に沿って自分のカリキュラムをつくっていく。縄張りというのがないので、それをできるところが国際関係学科で、教員もそれができたのです。もし社会学科というところに勤めていたとすると、「あなたのやっていることは社会学ではないのではないか」「学生にももう少し社会学の勉強をさせなさい」など、色々なことがあったと思うのです。しかしそのようなことが一切ありませんでした。

それぐらい、私は大いに勉強させていただいていたわけですが、もう一つここでは、地域研究が重視されていました。この地域研究は、そこに住む人々の生活、営みということに焦点を当てて、そこから色々なものを考えていく。戦争にしろ、紛争にしろ、開発にしろ、そういう人々にとってどういう意味を持ったのかを考えていく。

1970年代の中ごろだったと思いますが、国際政治学会のシンポジウムで、本当に若気の至りですけど、大げさに、農村社会学と国際関係論の融合を私は目指すと宣言しました。実際その後、アフリカのある国のある農村で20年ぐらい調査を続けることになりましたが、やはり今言ったような視点でやってきたわけです。

津田塾大学における地域研究

地域研究ということで、ここでやはり感じたのは、周辺地域から国際関係を見る、あるいは周辺地域を非常に重視することです。小国から大国、あるいは旧植民地から旧宗主国、あるいはマイノリティーからマジョリティー、そのようなところから見える世界、人々の生活の在り方が、ここでは非常に重視されてきた。それも私には勉強になりました。

最後に、その地域研究の関連で、日本近代史という講義があります。その日本近代史の担当者が許世楷先生、台湾のご出身で、『日本統治下の台湾』という本を書かれている先生ですが、その先生が日本近代史の前半を、朝鮮研究をされている、東アジア国際関係史の林哲先生が後半を担当しました。

日本を相対化した視点で考えるということでしょう。例えば今、ある国の脅威と言ったりしますよね。脅威を与えられるのは自分たちばかりだと考えている。けれども自分たちが脅威を与えている存在でもあることを忘れないということでしょう。世界最強の軍隊の基地が日本や韓国にはある。自分たちの脅威だけではなくて、周りの社会が、どのように自分たちによって脅威を与られているかという視点も重要でしょう。

初めから国際関係学科には、そのような問題意識で自分たちの社会を考えていくというものがある。沖縄研究というものが非常に早くからあったのも、大和なり、あるいは東アジアなり、あるいは冷戦なり、世界を沖縄という地域からとらえる、そのことの意義がやはり非常に大きいものがあるというのが、設立のかなり早い時期から意識されてきたのが素晴らしいところですよ。

私がそのような中で育ったということは、非常にありがたいことだったと思います。ですから、学生に時々、「私は津田塾大学の卒業生ですよ」と言うのです。今日は前半の17年間の話がほとんどでしたが、次の17年間も別の意味で充実した時を過ごさせていただきました。

—専門だけでなく、むしろ自分の関心のほうが重要だということや、世界史的な文脈の中に位置づけられる地域研究において、周辺からの視点の大切さについて、よく分かりました。

—続きまして、林哲先生にお話をいただきます。林先生は、国際関係学科設立の背景となった戦後の日本の立ち位置を再考する際に欠かせない、

東アジア地域の国際関係で近現代史を担当されてきました。

自身のルーツと当時の就職

林 私は、子どもの時に韓国から来たのですけれども、日本では一般的には在日朝鮮人という言い方が普通ですが、これには歴史的な背景があります。複雑な事情は割愛しますが、子どものときは、私はソウルに住んでいました。でも朝鮮語／朝鮮人という言い方でした。従って今のように、とくに北朝鮮が自らを単独で朝鮮といい、韓国では自分たちのことを韓国というものですから、なにか対立だけがめだつようですがここにも自然な変化とは言えない背景があります。韓国、朝鮮という呼び方一つにしても歴史的経緯や背景があって、最近では相互認識が進んでいるようで状況は改善されています。朝鮮半島が第二次大戦後、人為的に2つに分断されてしまった問題に対しても、朝鮮人の責任が第一とは言えない背景を含めて南北双方は言うまでもなく世界的にも認識が格段に進んだといえます。日本はどうか、という問題はありますが。

そのことを一応置いておきますと、私が津田塾大学に採用されるのは1983年で、同時期に、首都圏の大学に職を得た友人がいるのですが、私たちの例が朝鮮人として大学教員の職に就いた最初でした。もちろん例外はあったかもしれませんが、私たちの知る限りでは初めてだったわけです。不思議な因縁ですが、当時の日本の社会が抱えていた矛盾の象徴として申し上げます。大学院でも日本育英会でも国籍条項のために私たちは員数外で、研究や教育の職に就くなんて現実的には考えられなかったのが当時の状況でしたし、今日からすればなかなか想像

しがたいところです。当時の津田は教員の採用に関してはそれを突破したわけですね。



林哲先生

津田塾大学に対する数々の驚き

1983年に来たのですが、津田塾大学に国際関係学科ができたということは、既にその何年か前から、私たちの大学院でも評判になっていました。経済学部、法学部というすぐ分かるような代物ではなく、国際関係学科が学科として組織される。まさかそこに自分が赴任することになるとは、正直信じられないような状況だったのです。しかしそれも当大学における国際関係学の考え方、特徴的な問題意識が作用したかもしれないと思っています。今日は朝鮮について話していますが、朝鮮に限った話ではなく、世界的に「問題」を抱えている地域であれば詳しく取り上げる必要があるからです。

専任になり2年生の英語の原書講読ゼミで学生が、「1年ゼミで、朝鮮通信使について学んだ」と言っているのです。「君たち、どこのゼミ？」と聞くと、「ドイツ語のゼミ（三浦先生）です」「朝鮮通信使？」「はい、今私はハングルも学んでいます」と言います。「一体ここはどうなっているのか？」と思いました

が、三浦先生自身が、朝鮮語を学ばれているわけですね。こういう状況もそれまでの私の偏見から考えると全く新鮮な出来事でした。

世間的に考えると、津田塾大学は英語が有名ですから、英語を通して国際政治や国際関係を学ぶというようになりがちですが、英語を通して国際政治を勉強することになれば、当時の状況ならば、完全に権力政治やリアリズムの世界、たとえば核均衡論などが対象で、これを勉強するのも大変です。3年間取り組んでも、簡単には分かりません。世界にはそれぞれの専門家もおり、それぞれの細かい理論もあります。津田塾大学の国際関係学科では、カリキュラムと科目の配置から核均衡論はやらないという姿勢や展望を私は感じました。

そのような地域に関するカリキュラムの編成が特徴的と感じられたのは、非常勤で伺っている時に、私の認識では、ソ連あるいは社会主義圏、それと対抗している周りの先進資本主義諸国といいますが、これらの間の広い地域の動向に焦点を当てているような問題意識です。これは要するに、カリキュラムを考えている人たちの問題意識であったのか、それとも具体的に、結果的にそうなっていたのか、という問題ですね。

見ていると日本を含めて、昔、鄧小平が、中間地帯論などと主張していましたが、微妙なところに問題意識が向くような形の構成でした。それから日本について、その当時、東京大学の社研におられて、その後、津田塾大学で教えられた林茂先生が、植民地時代の朝鮮の京城帝大で教鞭をとっておられ、東大、そして津田塾大学でご一緒させていただくなど、本当に深く考えれば、関係性というのは興味

深いものですね。初期のころは、国際関係学と朝鮮・東アジア研究の教学をいかにすればよいだろうか、と相当悩みました。

小倉充夫先生が紹介なさったように、日本研究がそのような形で構成されていたと、日本を中心にして、その周りの周辺に衛星状に広がっていると同時に、むしろその地域出身の教員がおられるというのもとても印象が強かったですね。当時はベトナム戦争や文化大革命以後の大変な状況だったのですが、国際関係学科のアジア人教員の存在は特徴的でした。

当時津田塾大学では、中国残留孤児出身の方が、初めから中国語・中国研究の非常勤講師としておられたのです。その彼が書いた本は、『中国人として育った私』です。台湾研究は、そのころは明確にはなかったかもしれませんが、許世楷先生が国際政治の一環として行う。そして、私が来て、それ以降、シンガポリアンである蔡史君先生も来られました。許世楷先生、蔡史君先生、私の東アジア出身の3人と、そして『中国人として育った私』ですから、何にしろ、日本を内外から多様に見るのです。

日本を非常に相対化して見るという構造が成立していたことに、当初は気が付きませんでした。しかし、この国際関係学科の、当時の教員の方々の中などに、たまたまそういう問題意識が非常に強くあったのだと考えられます。

朝鮮に関する地域研究の講義が、当時上述したような編成で当大学でありましたが、ほんの一部の大学に朝鮮史の講座はありましたが、他にはなかったと思います。

朝鮮語、韓国語を教える、NHKの『アンニョンハシムニカ』という番組が始まったのが、1980年過ぎだったと思います。1983年、当時は津田塾大学でも、朝鮮語を授業で教えることはなかったのです。ただ、学生が積極的で、「先生、朝鮮人ならば教えてください」ということで、もともと非常勤のころから昼休みに朝鮮語を教えていたのです。学生たちが関心を持った時の熱意や意欲というのは大変なもので、本学で育った方々にはなかなか頭が上がりません。

国際関係学科として考えるときの問題

そのころはとても張り切って過ごしていたのですが、問題は国際関係学科の教学体系のなかに位置付けなければということがありました。ただ、これもまた大変で、まず当時は、朝鮮分断の歴史過程が、北朝鮮においても韓国においても謎に満ちていて、資料はほとんどありませんでしたし全く五里霧中という状況でした。朝鮮がなぜ38度線で分断されたかというのは、南北は言うまでもなく様々な意見の対立があり、それを勉学の対象とするのは学生たちにとっても、大変なことでした。そのような問題は、今も山ほど残っているのです。しかし実際に取り組むことが重要で、韓国では目を見張るほどの変化が起きています。

大事なことを見極める

私が申し上げたいのは、朝鮮半島を中心として、台湾、沖縄、中国、そのような問題を考えてみますと、日本のいわゆるテレビ系メディアを信用してはまずいわけです。出てくる評論家や専門家よりは、津田塾大学で学ばれた専門家のほうが断然信頼できると思います。

私が驚いたのは、沖縄大学に初めて交換学生制度を作ったときに行かれた学生の方が、今日この会

場に来ていらしたのです。何 10 年ぶりかでお会いしまして、そういう方が今も大活躍されていることが素晴らしいです。

もう一つだけ、実は国際関係学というのは、色々な既存の学問とは異なって、世界のメインストリームからは外れた地域から現代世界を見ようとすると、そこにこそ極めて重要な問題が色々あることが分かるのですが、それを学問的にきちんと説明しようとすると絶対に不安が残ります。皆さんは、環境とか研究条件について何がないとか、これが足りないと必ず言います。ところがこれは大きな大学でも、どこに行っても、アメリカでも同じです。津田塾大学と同じ運営の仕方なのです。津田塾大学の国際関係研究所に行ってみると、ビラがたくさん貼ってありますよね、どこで何の講演が、何についてなのか。そういう形でニューヨークのコロンビア大学でも行われている。ゲストスピーカーとして、その当時のトピックについて話すと、そこに多くの人たちが来て意見交換が行われるのです。

中身が一番問題で、現代世界にいる皆さんが関心を持つ問題をどのように研究すれば、より高い次元に行けるのかということは、熱意、それに対する取り組み、研究の先達、仲間が大事です。現代、例えば朝鮮半島、韓国との差、色々な問題が山ほどあります。それについても、研究を通じた認識と、誤った情報や認識は厳しく区別しなくてはならないのです。

—林先生、ありがとうございました。戦後の東アジアの国際関係における日本の立ち位置を再考する際のアプローチに関して、独自の問題意識を

軸とした国際関係学科の特徴について主にお話をいただきました。

一次は、加納弘勝先生です。加納先生は、津田塾大学独自のウェルネス研究と地域研究を関連させ、多文化・国際協力コースの設置に尽力してこられました。コース設立を可能にした背景などについてお話を伺いたいと思っております。

加納 今日の参加者のなかで、私が、最後に津田塾大学に赴任してきました。それまでアジア経済研究所、現在のジェトロの一部で、イラン研究を開始し、その後、トルコなど都市研究も行いました。当該社会の社会構造と集団に注目し、社会学の視点から地域研究をしてきました。しかし、対象地域のイランでは、1979 年には体制が崩壊するのを目の当たりにしました。イランに滞在した 1975 年に、バスでアフガニスタンに行き、バーミヤンの大仏の頭上に恐れ多くも立ってしまいました。1979 年旧ソ連のアフガン侵攻後の戦闘を聞かされた時に、大仏の頭上に立って見た、緑豊かなバーミヤンの農村が忘れられません。革命と戦争に直面し、地域研究にも宗教や文化価値の研究が不可欠と痛感しました。

多文化・国際協力コースへと導いた観察

1989 年に津田塾大学に赴任し、比較文化、後の第三世界の社会と国家、そして、中東研究を担当しました。その後、国連で活躍された志村尚子先生が学長（1996～2004）になられ、私も財務補佐をし、津田塾大学に新しい何かが必要と考えました。その後、2003 年には、英文学科、国際関係学科の横断コースである、多文化・国際協力コースが新設されました。



加納弘勝先生

赴任後、津田塾大学を観察し驚いたことが2つありました。1つは、津田塾大学には個性豊かで多様な教員と学生がいて、なかでも多数の卒業生や在学生在が、世界各地に出かけ現地で活躍していたことでした。スーダンを訪問したときには、卒業生が大使館に勤めており、在生もラテンアメリカに長期留学をしていました。外国の地域研究や経済協力などを学ぶゼミでも、それ以外のゼミでも、在生は活発に現地に出かけていました。

もう1つは、今のウェルネス・センターを中心に、保健、カウンセリングなどに携わり、ウェルネスの活動を続ける水脈が繋がっていました。

しかし、津田塾大学を観察して気になることが1つありました。ゼミでもウェルネス・センターでも、属する卒業生や学生は繋がりを見出し、独自に人脈を広げていましたが、多様で活発な、ときには異質な活動を、大学は「放任」していて、「多様で異質な」活動から大学が学ぶ姿勢は弱いことでした。そのため、「多様で異質な」活動は放射線状に広がるだけで、逆に、これらの活動を大学に引き寄せ、「これこそ津田塾大学、あるいは、津田塾大学の世界」と意識して捉えることが脆弱で、将来の津田塾大学の在生など若い世代に、大学として伝えきれていないと思いました。津田塾大学に集積されているは

ずの「多様で異質な」活動を組み立てて発信する試みを、大学として進められないかと考えました。

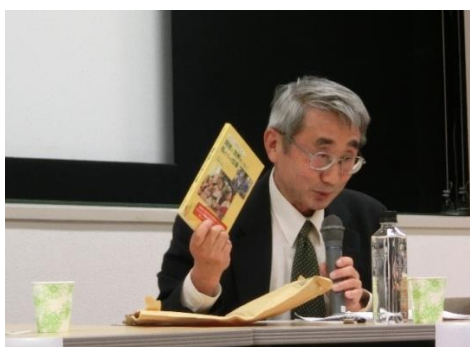
津田塾大学は少人数教育で、生徒の数も少なく、教員の数も当時特に限定されざるをえませんでした。限られた人材をもとに、「これこそ津田塾大学」を発信するには、「多様で異質な」活動をしてきた卒業生や在生の実績と、それらの活動の基になっている、「現地を訪ね、現地で学び、現地から学ぶ姿勢」を、新しい試みに組み込むことが必要と考えました。

当時、すでにいくつかの大学では、外国研究などの形で、現地フィールド・ワークを行っていましたけれど、多くがゼミ単位や教員の指導のもと現地に集団で行っていました。津田塾大学のフィールド・ワークは、設置後に、三砂ちづる先生などの指導で充実したように、「個人で企画し、相手の地域と自分で交渉し、個人で出掛けていく」フィールド・ワークであり、この「過程」こそが現地調査の醍醐味であり、「現地で学び、現地から学ぶ」経験が、卒業後に「貴重な原体験」になると思われました。新設の3つのゼミでは全員に「個人で進める」フィールド・ワークを課しました。津田塾大学で学んだ卒業生、在生の活動から、大学が学んで組み立てた仕組みと見ています。

現場で活動する卒業生と学生を繋ぐ形でオープン・リサーチ・センターを設置しました。2006年と2007年には、コースの在生が、卒業生の経験から学ぶだけでなく、自分で進めたフィールド・ワークを、現地で活躍する卒業生に伝える、「互いに語り合う」シンポジウムを開催しました。「目指すところに“とびこむ”気持ちを刺激された」とのメッセージや高

校生の参加をシンポジウム終了後に知り、大いに元気づけられました。

新コース初の卒業生が出る卒業式直前に、シンポジウムをまとめ直して『現地と世界をつなぐ私たちの仕事』（2008）を公刊し、将来の津田塾大学生を含め、多くの若い人たちに語りかけることにしました。教員、卒業生、そして在學生がともに寄稿した、「これこそ津田塾大学」を体現した書です。あとがきに、当時の「熱気」と、「10年後に（こうした形で）、『語り合える日』が来ることを願う」と記しました。約10年後の本日のシンポジウムが開催され、当時の願いが実現されました。



その本を見せる、加納弘勝先生

その後の国際関係について、多文化・国際協力学科が文科省に認可される過程で、母体の国際関係学科のカリキュラムの見直しが行われ、国際の専門領域が発生時の「文学」に、「福祉」「社会学」の領域が加えられたと聞いています。オープン・リサーチ・センターで実施した活動もあって、国際ウェルネスという独自の領域が国際関係学科の1つの柱になり、「国際福祉論」など、通常の国際関係学科を越えたカリキュラムが提供され、途上国や日本の医療・福祉に注目した試みを推進しているそうです。

地域研究への考え／「津田から学ぶ」

国際関係学に関連し、一言つけ加えさせていただきます。赴任後、国際関係学に刺激を受け、国際関係を視野に入れた社会学的な地域研究が必要だと感じました。なかでも、国際関係学から私が学んだことを、1つあげるとすれば、百瀬宏先生の著『国際関係学』に記された、「地域とは、地表上の『広狭の広がり』をもつ特定部分」という指摘でした。私なりに読み変え、「地域の広狭、地域の広がりと縮小」が、どのような条件で成立するのか、その要件は何かなどに興味をひかれました。そして、地域に居住する人々が、「これこそ自分たちの世界と思う」地域こそ、広がりや狭まりの基準に思えました。

紹介された私の書が『世界のピース・地域の織物』ですが、「これこそ自分たちの世界」と地域の人々が思う様子を検討した所産で、津田塾大学でずっとピース研究に邁進してきたわけではございません。

「地域の広狭」という視点から、津田梅子のお父さんで津田仙という、「農は百工の父母」、「自由は重し」を唱えた農業改革者にもう一言だけ触れます。明治初年に、「学農社」農学校を開設され、技術や知恵を伝播する『農業雑誌』を発行され、明治前半に活発に活動され一世を風靡されました。津田仙、それを集団で支えた卒業生、『農業雑誌』の読者がいて、卒業生は地方で明治の農業の革新を進め、多くの読者が地方の果樹園、地場産業を起業し、電気・鉄道の敷設などに尽力しました。まさに官に頼らず、「民業自奮」に応えた、多くの人々が、「津田仙の学農社」と『農業雑誌』に集まり、これこそ「自分たちの世界」と見なした「地域の広がり」

を体現し、また、その後の「狭小」も体現しました（『国際関係学研究』, No45, 201, 津田塾大学, 2019 年 3 月）。

国際関係学科創設 50 年を経て今後も、「津田で学び、津田から学ぶ」、「現地で学び、現地から学ぶ」、この 2 つの基準を謙虚に、そして「意識」して、学生も、また、教員も堅持しようとする限り、「これこそ津田塾大学の世界」は広がりをもって展開できるものと確信しています。

—ありがとうございました。「津田で学ぶ、津田から学ぶ」という大変印象深いお言葉を伺えました。多文化・国際協力コースという津田塾大学独自のコースの設立の背景には、卒業生と大学の貴重な交流、そこから得た「現地で学び、現地から学ぶ」という理念、そして、そうした理念を維持する津田塾大学の、世代にかかわらず多様で色々な世界観というものが重要な役割を果たしていることがよく分かりました。

—最後に、百瀬宏先生からお話を頂戴したいと思っております。百瀬先生は学際性と地域研究に基づくカリキュラムの構築に尽くされ、さらに多くの研究者の育成に携わられました。また、国際関係学科の発展に関して、多方面からご活躍されました。

百瀬 私が話を始めるとしますと、藤村瞬一先生という方との思い出話から始まります。

この大学に当時「感銘を受けた」

私が津田塾大学に赴任をしまして、そのころ、藤村先生が案内してくださったのです。津田梅子先生

の奥津城（おくつき）があります。手前の運動場、あそこには皆さんがご存じのようにテニスコートがありますが、ほとんど初対面であった藤村先生が、私を運動場の一番手前の小高い所に連れていきました。そして色々と津田塾大学の話聞いたのです。

すると、運動場の向こうのほうでテニスをしている学生たちが、突然テニスをやめまして、こちらに向かって手を振るのです。藤村先生を見掛けて、手を振っているわけです。そうすると、藤村先生のほうも、にこにこ嬉しそうな顔をしながら「おお」とやっているのです。あのころはそのようなことは、大学では想像もつかないのですよね。皆さん驚かれるかもしれません。その風景を見まして、私は非常に津田塾大学に感銘を受けたのです。



百瀬宏先生

自らの恩師である先生を津田塾大学へ

それから間もなくのことですが、私は一つ使命を授かりました。「津田塾大学に慣れたらどうか、今度は一つ、打診をしてもらいたい」「おまえの恩師の江口朴郎先生を呼んでこい」このようなことを言われました。私は恩師の就職を世話したなどということとは一度もございませんから、とにかく当たって砕けろで、江口先生に連絡しました。そして、東京駅の丸の内のある喫茶店でお目にかかったのです。私はかしこまって、お茶とお菓子を前にして、それを見つめるばかりだったのですが、ようやく顔を上げ、「先生、津

田塾大学に赴任してくだいせんか」と切り出しました。

ところが、江口先生のほうから意外な言葉が出てきたわけです。「私に一般教養の授業をやらせますか」と聞かれたのです。私は「それは先生、もちろんです」と。もちろんですというのは、当時、赴任して一般教養の授業をやらせないと言う教師がいたら、すぐに叱られてしまいます。私はそれしか頭に浮かばないものですから、もちろんですと言ってしまったので、しまったなと思いました。ちょっと様子をうかがっておりますと、江口先生が「私を津田塾大学に赴任させたいというのであれば、一般教養の授業をさせる」と。

あのころは、大学で一般教養の授業というのは、専門課程の先生は受け持つことを考えない授業が随分あったのです。これは津田塾大学の精神からすると「けしからん」と言われました。私は正直なものですから、そのまま言っしまい、しまったなと思い、先生の顔をうかがっていました。江口先生は「それならば私は赴任しましょう」と簡単に決まってしまったのです。江口先生はそういう姿勢で津田塾大学に赴任されたことをご報告申し上げて、終わりにさせていただきます。

一大学教育に多大な貢献をなされた江口先生のエピソードを交えたお話、大変ありがとうございました。

一コメントやご質問がある方は、お伝えください。

Q. 今の百瀬先生の話で、どうして江口先生は一般教養をやったかったのでしょうか。

百瀬 先生は、そういうこそが教育であり、研究者たるものが若い人たちに授業をするときの心掛けだと思われていたのです。私はよくそれは理解できます。皆さん、それは言うまでもないことです。大学の教員としても、まず、第一にあるべき心掛けだと私は思っております。

一何かコメントや一言ある先生がいらっしゃったら、お願いいたします。

長沼 さっき言いかけてやめてしまったのですが、入学試験のことです。津田塾大学の入学試験は、ある意味では今言われている問題をかなり先取りしてやっていました。つまり、記述式の小論文を書かせることをかなりやっていました。

今問題になっている記述式で評価がどうなのかという問題がありますけど、最初のころは、随分ゆとりがあったので、1つの答案を2人の先生で見えて突き合わせる。一致することも相当ありますけど、時にはかなり評価が分かれることがあるのです。そのようなときには、非常に丁寧に担当者同士が話し合って点を決めようということにしました。

もう一つは、今の問題、確か今年からですか、高校の歴史教育が歴史総合という科目になりますね。われわれも随分昔、入学試験のときに、日本史と世界史を融合した形で試験問題を出せないかと考えました。その当時、事務局を通じて文部省にお伺いを立てたら、駄目だということでした。そういう意味では、今の入学試験の問題を津田塾大学としてはかなり早くから行い、あるいはその他にも、試験範囲を近現代に限定しようなど、色々なことを考えました。ただし、一方では文部省の制約があり、必ずしもうまくいかなかったという思い出があります。

—国際関係というとても大きなテーマを学ぶにつ
きまして、国内的かつ国際的な視座や、もしくはそ
の学際的な視点をもって、大国だけではなく、周辺
国や地域の事象に関して、先生や学生双方から学
びを得ようとするそうした理念が、今までの津田塾
大学の国際関係学科の展開の根本にあったという
ことを大いに学ぶことができました。

(司会：倉石東那、田中陽香)

第2部

パネルディスカッション

国際関係学科、多文化・国際協力量科、およびOGの先生方による

国際関係学科の展望 —地域から見た国際関係—

三砂 ちづる（司会）（津田塾大学学芸学部 多文化・国際協力量科 教授）

高橋 和（山形大学 名誉教授）

今泉 裕美子（法政大学国際文化学部 国際文化学科 教授）

小林 知子（福岡教育大学教育学部 社会科教育ユニット 教授）

伊藤 るり（津田塾大学総合政策学部 総合政策学科 教授）

柴田 邦臣（津田塾大学学芸学部 国際関係学科 准教授）

朴 正鎮（津田塾大学学芸学部 国際関係学科 教授）

●パネリストの紹介

三砂 ちづる(司会) MISAGO Chizuru

津田塾大学学芸学部 多文化・国際協力学科 教授。主な担当科目は「国際保健論」「ヒューマンセクソロジー」。著書『女が女になること』(藤原書店、2015 年)他。

高橋 和 TAKAHASHI Kazu

山形大学 名誉教授。専門分野は国際関係学、東欧地域研究。1983 年、津田塾大学大学院 国際関係学研究科 後期博士課程を修了。著書『変貌する権力政治と抵抗—国際関係学における地域—』(彩流社、2012 年)他。

今泉 裕美子 IMAIZUMI Yumiko

法政大学国際文化学部 国際文化学科 教授。専門分野は国際関係学、日本・ミクロネシア関係史。1994 年、津田塾大学大学院 国際関係学研究科後期博士課程を修了。編著書『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究』(日本経済評論社、2016 年)他。

小林 知子 KOBAYASHI Tomoko

福岡教育大学教育学部 社会科教育ユニット 教授。専門分野は国際関係学、近現代東アジア国際関係史(コリア・スタディズ)。1997 年、津田塾大学大学院 国際関係学研究科 後期博士課程を修了。著書「朝鮮戦争下における在日朝鮮人の同時代史認識と東アジア史」(『歴史学研究』908 号、2013 年)他。

伊藤 るり ITO Ruri

津田塾大学総合政策学部 総合政策学科 教授。一橋大学 名誉教授。専門分野は国際社会学、ジェンダー研究。1979 年、津田塾大学大学院 国際関係学研究科 修士課程を修了。著書『ジェンダー研究を継承する』(佐藤文香氏との共編著、人文書院、2017 年)他。

柴田 邦臣 SHIBATA Kuniomi

津田塾大学学芸学部 国際関係学科 准教授。専門分野は社会学、ソーシャルインクルージョン論、情報社会論。著書『〈情弱〉の社会学』(青土社、2019 年)他。

朴 正鎮 PARK Jung Jin

津田塾大学学芸学部 国際関係学科 教授。専門分野は東アジア研究、国際政治論。著書『日朝冷戦構造の誕生 1945-65 一封印された外交史』(平凡社、2012 年)他。

はじめに

——国際関係学科のこれまで

三砂 この50年間、津田塾大学文系学科は国際関係学科と英文学科でやってきました。この間、世の中の大学は色々な学科改組を繰り返していましたが、津田塾大学は何の改組もせず、おだやかな50年を過ごしておりました。ところが、18歳人口激減の今、このままではやはり応募人数が減る。改革をしなければならない、ということで、2019年、50年目にして、小平キャンパスも文系学科改組が行われました。

それに先立つこと2年前の2017年、千駄ヶ谷キャンパスに、この学芸学部とは異なる学部である総合政策学部ができました。国際関係学科からは、大島美穂先生と萱野稔人先生がそちらに移られました。

その後、この国際関係学科にも変化が起こり、今年、多文化・国際協力学科が設立されたわけです。国際関係学科からは5名の教員、三澤健宏先生、木村朗子先生、木村真希子先生、丸山淳子先生と、三砂が移りました。学生定員245名だった国際関係学科はこの4月から、定員が200名、教員28名体制ということで運営されています。現在の国際関係学科は、グローバル・国際関係コース、地域・文化コース、国際日本コースという新しい3コース体制で4月から動いております。

第2部では国際関係学研究科をご卒業し、大学で活躍している先生方4名にお話を頂いた後、学芸学部の現役の教員3名が話をします。順番は、高橋先生、今泉先生、小林先生、伊藤先生です。伊藤先生は津田塾大学総合政策学部の先生です。国際関係学研究科4回卒という形でご紹介させていただきます。その後、三砂、柴田先生、朴先生と話をしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



伊藤るり先生（左）と高橋和先生（右）

高橋 私は国際関係学科の第4期の卒業生になります。入学した年が、国際関係学科の完成年度です。2年次に最初のゼミを持っていたのが、小倉先生です。先ほどの話からすると、小倉先生が着任されてから最初の学生だったのかもしれませんが、3年生と、その後の大学院を通じては、ずっと百瀬ゼミでお世話になりました。

私が入学した当時の国際関係学科は、できて間もないということもあり、また、そもそも日本において国際関係の学部や学科を持つ大学はほとんどなく、国際関係学科・国際関係学とは何か、さらに津田の国際関係学とはどのようなものであるべきかということについて、先生方も方向性を模索されていたように思います。その中でたたき込まれたのは、専門分野に特化するタコつぼ型の教育・研究ではなく、専門領域を横断するような学問を目指すということでした。

このコンセプトで教育されたおかげで、他の領域に対する関心を持つことの訓練がされたと思います。

私が今年の3月まで勤務しておりました山形大学人文社会科学部では、社会科学系の総合政策科学科、それから、法経政策学科、現在では人文社会科学科と名称を変えつつ、法律、政治、経済、政策科学、人文科学、語学と多様な領域を持つカリキュラムを展開しています。現代社会のさまざまな問題が多領域からのアプローチでなければ解決できないという認識でつくられたカリキュラムですが、津田の国際関係学科は、設立当初から総合

科学の重要性を認識していたのだなと改めてその先見性に驚きました。

それと同時に、私自身が多領域からなる教育を受けたおかげで、自分の研究領域以外のものについても拒否反応を起こすことなく受け入れられるという柔軟性を持つことができたと思っております。一方で、学問体系という意味では、専門領域に関して手薄であったということは、大学院の研究論文を書くときのデメリットとして受け入れざるを得ませんでした。しかし、それは研究者としてスタートするときに、自分で習得すればいいだけのことであり、多領域を横断する教育を受けたおかげでさまざまな場面において、物事を俯瞰（ふかん）的に眺めるということも習得出来ていました。

私が大学院時代に取り組んでいた研究は、チェコのナショナリズムについてでした。歴史学的にはドイツ人对チェコ人という対立軸の中でチェコの歴史を理解するというのが主流でした。もっとも主流といっても、ドイツ人、フランス人という国家を単位とする歴史認識が圧倒的な主流であり、チェコ史というのは日本における歴史学ではドイツ史の一部として位置付けられており、傍流でしかなかったわけです。

しかし、大学院に在籍していた人のほとんどが、日本で取り上げられることのなかったマイナーな地域を研究対象としていました。ポーランド、チェコ、ハンガリー、ブルガリア、ラトビアという東欧圏や、ベトナム、インドネシア、インド、ケニア、クルドなど、外国語系の大学を除けば、そうした地域を教育科目に置いていたところはありませんでした。それ故に研究は手探りであったのですが、日本における研究の蓄積が乏しかったことが、現地の言語を習得し、現地の視点から考えるという研究の独自性を育むことになりました。これが後に、アメリカやイギリスのニュースを資料とするフィルターを通した研究に対して、現地の視点から分析できるという点が、私自身にとっても自分の研究の強みとして感じた部分です。

また、当時はまだほとんど関心を持たれていなかった東欧の研究を、大学が集中的に支援してくれたこ

とも「東欧研究といえば津田だよな」という評価を受けることにつながったと思います。

もっともこうしたマイナーな地域を研究対象としていることは、ドイツ史、フランス史という大国を対象とした伝統的な講座制を取っている当時の大学では、なかなか就職先が見つからないということにもなりました。

今であればハラスメントであろうと思いますが、国際関係学科の先生方はほとんど、先ほどもそうですが、男性ばかりだったので、女性だから就職のことは考えなくてもいいよねということを割と平気で仰っておられました。

このようにして、津田の国際関係学科研究科では、現地語を学び、現地に密着した地域研究というスタイルが定着していきました。

私自身についていえば、現地語と資料収集のためにチェコに留学しておりました。チェコに留学してみて、当時社会主義体制の時代ですから、歴史学はマルクス主義史学で、国際労働運動とか社会主義国家の連帯とかという見方が主流で、しかしながら、チェコ史という民族的な史観もチェコ人にとっては否定できないというジレンマの中にある歴史学でした。しかし2年間の留學生活の中で、私の体験はマルクス主義でも民族主義でもない現実をどう位置付けるかという問題に頭を悩ませることになったのです。

プラハの大学で私のルームメイトであった、ルチカという人がいました。彼女はチェコ人なのですが、第2人はスロバキア人です。同じ親です。親が違うわけではないのです。また、国境地帯だと、耳で聞いてさほど変わらないのに、チェコ語とポーランド語という違う言語に書かれてしまうことや、逆にスカンジナビアの留学生たちは、聞いていると明らかに違う言語を話しているのですが、通訳も介せず、彼らはお互いに理解できると言い切ることがあるわけです。すなわち、民族の構成要素として言語というのが必ず挙げられているのですけれども、私たちは民族概念をいかに頭の中だけで固定的に考えていたのかと反省させられます。

では、国家を形成する際の根拠となっている民族自決とは何なのか。民族概念そのものが曖昧なのだから、独立の根拠とはならない。とすれば、なぜチェコは独立したのかという問題を新たに問い直す必要があります。その中で答えを伝えてくれたのが、国際関係という視点でした。中から説明できないことを、国際関係という環境の中でどのように変化していくかという視点が独立への動きを説明することを可能にしてくれました。

さらに、第1次世界大戦中のチェコスロバキアの独立運動は、戦争という列強の権力闘争の真只中で、こうしたマイナーな動きが大国の動きを拘束するということが理解できるようになりました。列強はポーランドの民族自決を戦争目的としたために、他の民族の民族自決にも配慮せざるを得ず、ハプスブルク帝国は解体することになりました。

こうした視点は、列強の権力政治だけで国際関係を説明していた従来の研究に対する批判でもあります。こうして地域研究が国際関係と結び付くことで、他の地域研究と共通のプラットフォームを得ることができるようになり、研究の視野は格段に広がったのだと思います。

もう一点強調しておきたいのは、私たちがマイナーな地域を研究対象としてきたという経緯もあり、大国のように権力を持たない人々が自分たちの生活を守るために、いかに国際政治の中で権力に対して抗ってきたかという視点です。百瀬ゼミの卒業生による論文集、『変貌する権力政治と抵抗——国際関係における地域』というのですが、実はこの論文集は百瀬先生が60歳の還暦のときに出しますといって、なかなか出せずに、せめて古希まで待ってくださいと言って、それでもまだできず、そこからさらに10年かかり、ようやく私たちが出版にこぎつけた本です。

この本の帯の部分に書いた言葉が、実は私たちの立場を象徴的に表しています。すなわち、国際政治において表舞台に立てない小さな国や地域、それ故に見えてくるパワーポリティクスが貫徹する冷徹な国際関係の中で、それに抗い乗り越えようとする人々の営みと力強さを尊重し、そしてそれに敬意を

払うという立場です。権力政治を仕方ないと受け入れるのではなく、自分たちの生活を守るための努力を惜しまない人々の営みは、権力政治の主体となる国家ではなく、権力を持たない市井の人々の活動であったり、国境を越える運動であったり、さまざまな非国家アクターが担っています。その中に地域も含まれます。

近年私が取り組んできた「ユーロリージョン」という研究は、ヨーロッパにおける基礎的自治体が国境を挟んで協力を行うというミクロレベルの地域協力です。国境で隔てられていることによる生活上の不便さを解消するために結成された小さな協力体は、現在では200に迫る数に達しています。こうした数の増加は、制度化へと道を開き、現在ではユーロリージョンは、公法上の法人格を得ることも可能になりました。

地図を見れば明らかですが、ヨーロッパの国境線は、ほとんどこのユーロリージョンで覆い尽くされています。こうした状況は、現在の主権国家からなる国際秩序に異議を唱えるものであるといえます。地域という非国家アクターが、国際政治においてどのくらいの影響力を持つかということに疑問を呈する研究者もいますが、地域という場に視点を置くと、国家間関係だけでは見えてこない関係性と地域の側の論理が見えてきます。

ユーロリージョンは、いい意味でも悪い意味でも、地域がEUや国家を巻き込んで、自分たちの地域の理解を実現するためのツールとして利用されています。周辺の紛争に関わりたくないEUを引きずり込むということさえ行われているのです。ただか自治体の国際交流ですが、国家安全保障の分野にも影響を及ぼす可能性を持っています。もちろん全てがそうだということではなく、そうしたいという主体的、自発的な意志を持って動けばという話です。

私は山形で22年間、教育に携わってきました。国際関係論という科目を担当してきたので、なかなか自分の研究分野のユーロリージョンについて話す機会がありません。そこで「地域の国際化」という科

目を立ち上げました。これは現在選択必修である2年次の基盤科目に位置付けられています。

「地域の国際化」の授業では、出身地域の自治体の国際交流や国際戦略について調べて報告するということを課題としていました。この授業の初めは、私たちの生活がいかに国際社会から切り離すことができないかというところから始めます。相互依存というよりも、もっと深く一体化している状態を理解した上で、国際社会の中でどのように生きていくかを考えてほしいと思ってつくった科目です。その中で学生さんたちは、地域の国際化戦略について自分で調べて、政策提言として報告します。

山形では生活クラブ生協に食肉を提供していることをご存じの方もいらっしゃると思いますが、平田牧場という牧場が酒田市にあります。その平田牧場をはじめとして地域の企業やNGOが、実は直接対岸の中国の諸都市と関係性を結び付けようとする努力を長年にわたって行っていたということを、私はこの授業の中で知りました。地方には地方の論理があり、必ずしも日本イコール山形ではないし、日本の中の山形でもないということを実感しております。

山形大学人文社会科学部は、大学院は修士課程までしかなく、研究者を育てるという環境にはありません。学生たちは卒業後すぐに就職しますし、大学院に進学した学生も就職先は一般企業や公務員で、研究とは縁のない生活を送っています。先日、ペシャワール会の中村哲さんがアフガニスタンで殺害されました。中村さんの活動は軍事力による平和の対局にあるもので、授業でも紹介していました。この事件の後、一般企業に就職した卒業生たちが、いち早く自分たちのフェイスブックに追悼をアップしているのを見て、卒業しても大学で学んだことを忘れずにいてくれたことは驚きであり、うれしかったです。

津田塾には「一粒の麦、もし死なずんば」という言葉をもって、地方に行ってそこで津田の精神を生かすようにという教育方針があったと思います。卒業生たちが日々の生活の中で、国際社会のありようを考え、実践しているということに少しは津田の精神を実践できたかなと思います。

今多くの大学では、実用的ですぐに使える実践的な教科を増やすことが求められていますが、50年経って改めて思うことは、大学で学んだことで残っているものは、「社会にどう向き合っていくか」という哲学だったように思います。人間と社会との関係性、関係性と論理はそれぞれの立場によって異なること、それを認めていくことが津田塾大学の国際関係学の哲学ではないかと思っております。そうした哲学を、ぜひこれからもこの教育の場で涵養していただきたいと卒業生としては感じております。

今泉 私が研究科を修了し、津田塾大学で助手となった時、まさにこの教室のこの場で、新入生を目の前に初めて自己紹介をして、足ががたがた震えて声が出なかったという思い出があります。今学科50周年で同じ場に座らせていただき、改めて大事な機会を頂けたと思っております。

私は、実は医学や、生物学を学びたかったため、この学科に望んで入学してきたわけではなかったのです。ところが津田塾大学の入試制度のおかげで、数学と小論文で入学することが出来ました。倫理、社会、地理だけを勉強してきたので、日本史や世界史は基礎を高校で学んだ限りでした。ところがこの学科では、世界史と日本史双方の知識と認識も必要となり、国際関係とは何なのかということで、ずっと苦悩し続けたわけです。しかし、3年4年と百瀬ゼミに偶然入れていただけて、そこで色々考える機会が得られました。そして学外では、十大学合同セミナーという10の大学の国際関係を学ぶ学生が集まる研究の場がありまして、そこで津田塾大学にいる意味を考えることもできたのだと思います。

つまり私はこの学科の学生としては、「希少生物」であります。今もずっと「国際関係学とは何なのか」と考え続けています。それは私が、法政大学の国際文化学部の教員であることも関わりますが、そこで学生たちとのやりとりを通じて学んでいることもたくさんあります。

国際関係学科で得たこと

一つは「自分のテーマに向き合う」ことでした。国際関係学科の特徴として、学生に安易にテーマを決めさせないということがありました。対象自体は自由ですが、それを自身のテーマとして選び取るのが容易ではなかったです。過去の事象も現在の事象も、あるいは未来の事象でも、今を生きる私が対象にして研究するのですから、研究する意味があります。そのため研究科に進学するとさらに、どういった責任と覚悟をもって研究を行うべきなのかを繰り返し考えることになりました。

もう一つは、教員として働く中で、自分自身が学科で学んだことを学び直す機会になったと思っています。例えば百瀬先生ご執筆の『国際関係学』というテキストが1993年に出版されました。これが私の学部時代にあったらどんなによかったかと思うのですが、先生の「国際関係概論」という授業の中身がこの中に詰め込まれています。その後、2003年に百瀬先生は『国際関係学原論』を出版されましたけれども、国際関係学というのはいわゆる個別の専門分野でのディシプリンという意味とは異なる新たな専門性、方法論があるということが、こちらを読むとよりよく分かります。これらの本を私も読み、実際に教えながら、自分が学部のときに学んだことを考えていました。

1999年に法政大学に国際文化学部が設立され、開設とともに津田塾大学の助手以来初めて専任の教員として着任することとなりました。その前の年に、もう一度「国際関係概論」を受講しました。そのときのレジュメは今も残っており、百瀬先生が書かれた、第1回目の講義の開講の辞には「国際関係学（津田塾大学が創始者である）」と書かれてありました。これは津田塾大学で生み出された国際関係学の視点と方法への自覚を促したものです。そして卒業してからも現実の問題と格闘するときに、我々にとって非常に「有用」である学問であり、変化し続けている現実に取り組むための学問であるということを示されていたということです。「創始者である」ということについて、私たちが国際関係学を通じて考え

続ける限り、このように述べてよいのではないかと私は考えています。

研究において

私の研究テーマは第一次世界大戦時に日本が占領し、その後約30年間統治していた旧南洋群島（ミクロネシアの一部）を対象としています。学部のゼミでは第二外国語を用いて資料を読み、卒業論文を書く方針だったのですが、私はドイツ語を第二外国語として学んでいました。そこで、日独伊三国同盟締結をめぐる日独関係をテーマとしたのですが、当時の日独のやりとりの中で旧南洋群島は第一次世界大戦でドイツの支配から日本の支配に移ったことを知り、研究科での私のテーマとなりました。

研究科ではずっとそのことを研究してきましたが、このテーマをめぐる格闘が、私がどのように国際関係学を理解したかに関わってくるのです。当時の私には、既存の学会に居場所がありませんでした。ミクロネシアと言いますと地理的区分はオセアニアなのですが、オセアニア学会は文化人類学が中心でした。そして日本国際政治学会では、オセアニアというオーストラリアやニュージーランドの外交という分野になってしまふ。それから日本植民地研究会では、旧満州を対象とする経済史が中心でありました。移民も当時は現在ほど一般的な研究対象ではなかったのです。その後、私にとって歴史学研究会がメインに関わる学会になってはいくものの、日本の旧植民地研究といえば日本史か東アジア史かで分類されていたので、ここでも旧南洋群島研究の居場所は見つからなかったです。このように、どこで自分の研究報告を聞いてもらえるのか、あるいは学べるのかという問題がずっと付いてまわったわけです。

今となれば昔話のようですが、津田塾大学では「国際関係」として研究できたことが、外では研究の対象にならなかったのです。これは権力政治の周辺から国際関係をどう捉えていくのかということを示していると思います。

そうした中で私は、第一次世界大戦の際旧南洋群島にて、委任統治というシステムが植民地支配の便法として出来上がったのだということや、あるいは旧

南洋群島の日本人人口（朝鮮人、台湾人、樺太人を含む）の6割が沖縄出身者であったことから、何故沖縄から移民が旧南洋群島に来るのだろうかということを考え、沖縄研究と移民研究の分野にも関心を広げていきました。

こういった植民地支配と移民との関係について旧南洋群島を対象に行われた先行研究は、矢内原忠雄による戦前の研究だけでした。このことは偶然なのか必然なのか、私の研究を広げていくと同時にこの広がりを深めることになっていきます。

教員として

教員としては、津田塾大学で講義を担当させていただいたことに大きな意味がありました。その1つに、沖縄との関わりがあります。沖縄大学と国際関係学科の学生の交換制度があるのですが、私は学部時代、全く沖縄に関心がなかったものですから、ここで沖縄研究の授業を担当して国際関係学科の先生方の沖縄認識を学び直すようになります。

そして沖縄研修旅行を私が引き継いだことです。これまでは沖縄出身者の先生が案内していたのを、今度は内地出身の私が自分の研究を通じて関わった人たちとの関係を通じて案内をしました。そのため私なりの役割を常に考え、同時にその責任というものを深く考えるようになりました。ただ、津田塾大学の学生たちはとても元気に、とても責任のある行動を取り、そして卒業後も沖縄に関心を持ち続けるという形で学びを深めてくれました。この体験から、フィールドワークとは何か、現地で学ばせるということは何かということを自分なりに考えることが出来たと思います。

法政大学の国際文化学部で教えることになったことで、改めて津田塾大学国際関係学科の英語訳“Department of International and Cultural Studies”の意味を考えました。

国際文化学部は“Faculty of Intercultural Communication”といいます。ですから、“International and Cultural Studies”と“Intercultural Communication”（双方とも和訳に

「国際」、英訳に“Culture”を含む）に関してどのように捉えたらよいのかを考えました。私と国際系の専門ではない同僚の教員たちの考えで共通する点は、まず、文化の担い手を多様だと考えていくことです。文化の境目の存在自体が曖昧です。そんな文化をどのように捉えていったらよいのか、そしてその担い手をどのように考えていったらよいのか、自分がどういった担い手になるのか。さらにはその際のコミュニケーションはどうしたらよいのか。コミュニケーションをツールとしてだけではなく、対象と自分の関係性の中で考えるものとして重視しているのだと思います。

ただ、私の現在所属する学部は、情報文化、言語文化、表象文化、国際社会という4つのコース制になっていて、コンピューターや小説、ダンス、映画といったものが広く入ってくるのですけれども、どの分野でも、そういう取り組みが根本にあるのだと思います。

あらためて「国際関係」とは

そして最後に改めて考えることは、やはり「国際関係」という表現へのこだわりです。「国際」と略したり“international”と言ったりしますが、私はその「関係」のありよう、いわば関係性に非常にこだわります。「国際関係」という総体はさまざまな行為体によって歴史の中で変化していきます。自分を行為体として考えてみた場合、それは自分というものがさまざまな関係の中に存在して、働きかけられているのと同時に他者に働きかける存在でもあるということです。そういった存在としての主体性や立場性を考える際に、どの「関係」に自分が着目し、手繰り寄せ、そしてつくり直すのかということに関して自覚を持つのかや、自身を問い直すことで自分の内にある多様性に気づく重要性を、学生たちから学んでいます。

それから、「国際関係」というどうしても海外へと目を向けがちですが、日本も「国際関係」の一部であるという視点が重要です。留学（2年生の後期に全員が海外の10カ国15大学のいずれかに留学）から帰ってきた学生たちは、やはり改めて自分の足元を見るのです。私が学部生のころは、「足元の国際関係」ということがよく言われました。今、再びその

視点が必要になってきたのではないかと思います。世界を一体化させ現在に至る「国際関係」、その関係性の中に日本は存在しているので、日本の中をしつかりと論じることが出来なければ、海外のことも論じられないのではないのでしょうか。

やはり私自身が国際文化学部の学生から気づかされ学ぶことが絶えないこともあり、国際関係学自体も追究する対象であり続けたいと思います。在学中「台所から見える国際関係」という表現を聞き、外交官や政治家、研究者にならずとも「国際関係」の担い手になれると気づきました。これからも日々の生活から国際関係を捉え、理解し、そして繋がりを自覚できるような視点から国際関係学を学んでいき、同時に私もそのように教えていければというふうに思っています。



今泉裕美子先生（左）と小林知子先生（右）

小林 こんにちは、小林知子です。周囲の研究者等からは、在日朝鮮人史研究の小林というようにいわれております。今回、私がパネリストとして選ばれた理由は、今年、多文化・国際協力学科が独立して設置されたということで、私が福岡教育大学の国際共生教育コースで国際関係論を担当してきた者として、経験上話せることはないかということからのご依頼でした。

ただ、この共生社会教育課程国際共生教育コース（1999年に新設され、私は2000年に赴任したのですが）、今年の3月で廃止となり、課程自体がなくなりました。この時代に福祉社会と国際共生

のコースをなくすという展開のなかで、正直なところ、ここ数年疲労困憊な気持ちです。あらためて振り返ってみるとこの約20年間、至らないところは多々ありながらも、さまざまな学生たちを育ててきたという自負はあります。所属が変わり、日々の忙しさのなかで、それを総括する機会は未だ持てていませんが、この経験を自分なりに少しは振り返る機会になるかと思い、今回、お引き受けすることにいたしました。

福岡という地域から

「地域から考える国際関係」という視座に関し、私は福岡という地域に即して話させていただきます。

私は津田塾大学で、国民国家の相対化をめぐる議論が学会でも主流であった時期、国家間レベルだけでは世界を論じられない、ということを学び考えることができました。そして、福岡に身を置いてみると、東京にいた時とは異なって、生活実感からも「地域から考える」ことをより深く認識するようになりました。

福岡を拠点に考えると、福岡と釜山の距離は、福岡と広島とほぼ同じです。ソウルは、大阪との距離と同じくらいです。東京に行こうかなと思ったら、同じ距離で上海に行けます。北京への距離と札幌との距離が同じくらいです。よく、沖縄を中心に同心上に日本列島や他のアジアがどう位置するかを示した図を目に思うのですが、経産省九州経済産業局が発行している『九州経済国際化レポート』の本文は、毎年、福岡を中心に同心円上にアジアの他都市との距離を示す地図から始まっています。東京から見ると福岡は一地方都市にすぎませんが、福岡は名実ともに「アジアの玄関」なのだと実感できます。

九州全域で考えると、過疎や限界集落といった問題が日常的な課題としてあります。そうした中で、九州では、経済主導主義的な発想からだけでなく、ある意味、死活的な意識からもアジアとの連携に目を向けています。上記の国際化レポートでは「環黄海経済圏」が、ASEANやEU、NAFTA等と対比させながら重視されています。中国・韓国と九州の各都市をまわり、毎年「環黄海経済・技術交流会議」という産学官フォーラムが開かれて、もうすぐ20年に

なります。そこでは経済活性化だけでなく、それを担保する人材育成のため、教育や人的な交流の問題も議論されています。

大学院で学んだサブリージョンへの着目、地域間連携の視角に関して、このように私は福岡に即して意識してきました。例えば福岡では、日韓双方で認可を受けて、釜山・福岡間でダブルナンバー車が運行されました。自動車製造に際し、部品輸送の、物流の時間短縮のために、韓国と日本の2つのナンバープレートを付けたトレーラーが、港で荷物を積み替えないで、日韓の一般道を走ることができるようになりました。地域限定で、日産九州とルノーサムスンとが、日通と提携しての運行でした。日産をめぐる現状をふまえると今日どうなっているかは不明ですし、あくまでもグローバル企業の活動の一例ではあります。が、ダブルナンバー車の運用は利があったということで、中国との間でも認可を得るほどに展開しました。

また、福岡市教育委員会は、釜山の教育委員会と連携して、小学生用の福岡・釜山理解の副読本を発行したこともあるのですが、数年前には、小中高一貫しての英語教育を模索するなかで「福岡市らしい英語教育」の手引書を発行しました。そのなかで、モデルケースとして想定されているのは「韓国から来た友達と英語で話す」です。小学生用の好きな食べ物は何かという単元から、高校生用の環境問題について話し合うといった単元などが掲載されています。もちろん、韓国だけを相手として想定しているわけではなく、また個人的には、そもそも英語ではなく、お互いの言語を学びあうべきだとは思いますが、いずれにしても、英語教員の間では、福岡の教員が釜山の中学校で英語の授業をしたり、釜山の教員が福岡の中学校で英語の授業をする、という交流が行われています。

子ども同士の交流では、太宰府西小学校が、韓国の扶余という（百済の都があった）地域の小学校と1990年から直接交流を続けている事例が目されます。全員ではないですが、希望する子ども（5年生）が相手校を訪問し、ホームステイもします。その際、子ども自らが、ホームステイをさせて

もらうお宅に、習ったばかりの言語で国際電話することから始めるそうです。この卒業生に聞きましたが、子どもなりにどきどきしながら交流したそうです。この取り組みは、地域に暮らす方のひよんなお誘いから始まったそうで、それが30年以上継続してきたのは、学校だけでなく、地域の支援があるからこそだと思います。ある学生（卒業生）は、自分がなぜ韓国に興味を持つようになったかを改めて考えてみると、歴史問題など全く知らなかった小学生の時期に、このように、韓国の子と、とにかく楽しく遊んだ経験をしたことが大きかったかもしれない、と語っていました。

このように、私自身が「地域から」という観点をもふまえて国際関係論を担当してきたのは、やはり津田塾大学で学んできたからこそだと思います。しかし、先ほどの先生方のお話とも重なりますが、学生・院生時から、国際関係学とは何か、ということに関して考え悩み、模索してきたこと、それを今なお追究している状況に変わりはありません。

津田塾大学のような国際系の学部であれば、国際関係に関し、さまざまな地域や方法を専門とする教員がおり、教学の場がつくられています。しかし、私の所属する教育学部の場合、国際系の教員は限られ、包括的に、というか、概論的な部分をも含めて授業展開せざるをえず、自身の研究の専門的な部分を活かしにくいことが多々あります。

私は赴任当初から、国際共生の、国際系分野のカリキュラム編成をいきなり任されることになりました。津田塾大学で学んできたように、限られたなかでも、方法論と地域研究をくみあわせて学ぶことや、「問題解決学としての国際関係学」という視点を、重視してきました。講義では、今泉さんが掲げられた百瀬先生の『国際関係学』のテキストを毎年使わせてもらってきました。地域研究の講義や演習では、加納先生が挙げられたテキストも活用させていただいてきました。

国際共生の学生たちですと、当然に「国際共生とは何か」ということで悩むことになります。その際にも

「問題解決学」という視座をふまえて、地域の具体的な事例、固有名詞をもった人々の生活実態や課題を考えよう、と模索してきました。（「共生」を英語でならどう訳すかの議論（『国際共生とは何か』大阪女学院大学等）を手がかりに‘conviviality’？などとも考えてきました。）

福岡教育大学で学び、感じてきたことはたくさんあります。その1つは、学生の地域での活動を後押しすることです。（4月に新入生＋参加したい上級生・留学生と教員とで行っていた研修旅行で、一番多く訪れた地域は、大分県湯布院と日出生台でした。普天間基地移転問題に伴い、米軍の実弾射撃訓練が行われるようになった日出生台と、そのすぐ近くの湯布院です。国際政治や社会、農業や環境の問題、文化や町づくり、国際交流の課題などを、地域のNGOの方などのお話をうかがいながら学びます。）津田塾大学でも始まっていた多文化・国際協力コースで重ねられた実践とも響き合える部分が少しはあるかもしれません。福岡教育大学でお世話になった教員から教えてもらったことのひとつは、今の学生はなかなか自分で動き出そうとしないが、地域との連携など、「最初の一步の橋渡し」～最初の一步だけは一緒に行いさえすれば、学生は次からは一人で積極的に動けるようになる、ということでした。関連する人やNGO、学外のワークショップやスタディツアー等を紹介することを契機に、活動の場を広げていった学生はたくさんいました。

その他、総じて、学生と教員の距離が近く、また、留学生が常に身近にいたということ、行こうとさえ思えばほぼ実現できる留学も、国際共生教育コースの特徴だったと思います。（福岡教育大学は学生総数は津田塾大学と同規模だと思うのですが、改組前は例年、留学生が100人程度はいました。国際共生には友人を求める留学生が集まりやすく、国際共生の学生は、希望すれば、簡単に多くの留学生と交流できました。そのことや、ごく普通の学生が、留学を実現する姿を身近にみることが、自身が留学することへのハードルを低く感じさせたとも思います。）

ところで、私自身は、在日朝鮮人の日本社会と朝鮮半島との関係性について研究しています。在日朝鮮人は、植民地支配と冷戦構造の影響を強く受けた存在であり、このことは捉えかえせば、在日朝鮮人をめぐる、地域社会におけるさまざまな問題や課題を一つ一つ解決していくことが、継続する植民地主義や残存する冷戦構造そのものを解いていく一つの方法ではないかと考えており、そういった観点から研究をしています。

その他、日韓の大学教員・高校教員らと、歴史共通教材を作ったり、また、近年では、旧日本軍の軍人・軍属や、労務動員されて死亡した朝鮮半島出身者の遺骨をめぐる問題に着目しながら、日本の戦後処理や東アジアにおける信頼醸成の課題について、研究をしています。

この10数年取り組んでいる杵岐の事例は、戦後、引揚途上で亡くなられた方々の遺骨問題です。広島市の被爆徴用工問題が関わって問題は複雑化しましたが、韓国・慶州と杵岐との間で追悼を通しての交流が生まれて20年になります。杵岐や対馬で埋葬された朝鮮人遺骨問題を追究するなかで、対馬に流れ着いた済州島4・3事件の犠牲者の遺骨の問題にも注目するようになりました。日本の朝鮮との戦後処理や戦争責任をめぐる問題は1945年までの問題として括られがちですが、地域の具体的な問題にそくして東アジアレベルで考えるなら、1945年後の話にもつながっていきます。このようにして、私なりに地域研究を進めています。また、朝鮮人遺骨問題は、国際関係と宗教について考えられる事例でもあります。遺骨問題は政治利用されやすいという危うさもあるのですが、遺骨を眼前にして、その方の死に至った経緯をたどり、死者とともに弔いながらの関係性の構築には、より深く問題の本質を捉えられる回路があるのではないかと感じることがあります。仏教やキリスト教の宗教者の方々とも協働しながら模索しています。

私は現在、このような問題関心をもって教育・研究に取り組んでいます。在日朝鮮人をめぐる問題を手がかりとして国際関係学を研究するに至ったの

は、津田塾大学で国際関係学を学んだからこそであり、津田塾大学で先生方から教えていただく機会がなければ、私が在日朝鮮人に着目しようとはなかっただろうとあらためて考えています。

何よりも、学部3年次から大学院でも、ご指導をうけた林先生から学び、考えてきたことは格別で、一言では話されません。が、それだけではなく、学部1年の時に受講した三浦先生の哲学の授業では、先生が、在日朝鮮人で死刑囚となった李珍宇について、何回にもわたって語られてたことが深く印象に残っています。国際関係概論で課題レポートを書くために百瀬先生が作成されたリストから私が選んだ本は、田中宏さんの本でした。私が在学していた80年代半ばぐらいには、日常的に講義の中で、在日朝鮮人をめぐる問題が取り上げられていたのです。2年次には「第三世界の思想と文化」を受講しましたが、たまたまその年度は非常勤での姜徳相先生と尹健次先生の語る朝鮮論、在日朝鮮人論でした。

学生当時をふりかえれば、先生方から学問的刺激をたくさんいただいたことによって、私たちは問題関心を広げ、深めることができたのだと心から感謝しています。国際関係学とは何か、ということについては、現在もお模索している、としか答えられませんが、教員も、学生・院生も、ともに国際関係学をどのように追究するべきかを考える「場」があることが、とても大事なのではないかと、あらためて考えています。



伊藤るり先生

伊藤 私は実は国際関係学科ではなく、大学院の方で津田塾大学のお世話になりました。学部学生のころは上智大学のフランス語学科所属だったのですが、そこで国際関係論を学んでおりました。非常勤で教えていらった馬場伸也先生のゼミでしたので先生の著書である『アイデンティティの国際政治学』(1980)を通して、ケベックの独立運動などについて勉強していたのです。また、馬場先生からはカウンターカルチャーの話ですとか、The Greening of America(1970)とか、すごく懐かしいですけども、60年代後半のアメリカの運動や社会等について色々と教えていただきました。

私は当時、大学院という場所があることも知りませんでした。4年生のときに薄々と、この企業中心社会で自分は生きていくのは難しいのではないかと感じておりました。就活も苦手ですし、どうしたものかと思っておりましたところ、馬場先生に「津田塾大学の大学院を受けてみませんか」とお誘いいただきました。当時私はフランスの少数民族の、ブルターニュ人による地域主義運動について勉強をしておまして、それを卒論に早く書きなさいと言われました。資料をフランス語の原書で読むことはできていましたので、おかげで津田塾大学の大学院に入ることが出来ました。

修士課程で一緒に同級生というか、同世代の院生の皆さんも、今日の会場に何人かいらっしゃるようですが、振り返って見れば、今日第1部でお話を伺った先生方の薫陶を受けた、そういう同級生に恵まれたのだと思います。非常に折り目正しく、ディシプリンも大事にして、歴史学の訓練をきちんと受けていて、やはり「地域研究」なのです。フランス語およびフランス地域の研究ですが、少し違うなというふうに当時から思っておりました。

そういった視点からすると、わたし自身は学科の卒業生ではないけれども、学科の教育のベネフィットを間接的に同級生から受け、私自身も鍛えられました。

私の専門分野は国際社会学です。紹介文には、国際社会学とジェンダー研究というように中黒でつながっていて、おもにジェンダー視点から国際移民

を見るということを行っています。私は2年前まで一橋大学におりましたので、こちらの『ジェンダー研究を継承する』という本は、そこにいらした佐藤文香さんとの共編著であります。とてもよい本なので、ぜひ読んでいただきたいです。

フィールドはフランスです。具体的には、パリで家事労働者として働いているフィリピン人の調査研究をやっております。現在、共同研究のメンバーと一緒に『家事労働の国際社会学』という本を準備中です（人文書院より2020年2月刊行）。国際移民の中でも、再生産労働といわれている、あるいはケアといわれている分野で働いている移住労働者問題に焦点を当てて研究をしています。

このことを国際社会学と名付けることは結構大胆な話でして、家事労働といいますがどうしてもドメスティックな話のように思われます。特に日本の場合、家の中という意味でのドメスティックと、国内という意味でのドメスティックで、二重の意味でドメスティックな問題として位置付けられています。そうではないという視点をこの本の中で議論しています。

日本の社会学に国際社会学というジャンルが生まれるに当たって、津田塾大学の国際関係学が持った役割はすごく大きかったように思います。

馬場先生、小倉先生、梶田先生、それから何人かの若手の先生が、私が修士の頃に今はゲストハウスになっている建物に集まって、非国家的行為体に関する研究会を熱心に関わっていて、そこに、津田塾大学を卒業した若手の方々が集まり、その中から、この国際社会学というのが最初の形として生まれたと思います。

それが後に、90年代に入りますと、一橋大学に梶田先生がお移りになられまして、国際社会学という科目を設置することができるようになりました。それから勘定しても、もうだいぶたっているわけですが、梶田先生が急逝されたので、私は2007年に一橋大学に参りました。

当初の国際社会学は、国際社会の学や、あるいは地域研究を強く志向されていたと思いますけれども、今はそれとは違った形で展開していると思います。一橋大学では、国境を越える諸現象を社会学の方法で読み解くというふうな言い方をします。それは、小倉先生が最初におっしゃった、社会のことを国際関係学の中から問い直すということと、対照的ですけれども、相通じるところもあると思います。

なぜジェンダー研究かというと、国際社会学、国際関係論、国際関係学、と学問をやるからには、わが事としたいという気持ちがとても強かったからです。国際関係論、国際社会学であっても、なかなか女は現れてきません。どこに女がいるという話に、どうしてもならざるを得ませんでした。

1990年に、アメリカのフェミニスト IR（国際関係論）で著名な研究者であるシンシア・エンローが、『Bananas, Beaches and Bases（通称 BBB）』という本を発表し、これをきっかけにして国際関係論をやるに当たって、ジェンダー、フェミニストスタディーズの成果を取り込んでいかないとならないのではないかという機運があちこちで高まりました。

私自身もこうした動きに触発されました。日本においては、80年代の半ば以降、「ジャバゆきさん」問題というものがありました。「ジャバゆきさん」は、エンターテイナー（興行）という在留資格で日本に入ってきます。1989年か1990年の入管法改正の手前で、いよいよ「外国人労働者」問題という言葉が出始めたのですが、そうなった途端に「ジャバゆきさん」は消えるのです。その問題から消えていきます。「ジャバゆきさん」の問題は、では一体何なのかといえば、暴力団による強制売春の被害者であるとされました。人身取引の被害者であるということです。能動的な就労機会を求めた主体としては見なされず、労働者ではない、というふうなディスコース、表象の在り方が当時、支配的でした。そういうことにフラストレーションを感じた私は、これを批判をするという形で、「ジャバゆきさん」問題を再考するという論文を書いたことがあります。

そのときは既成の知識を批判するというスタイルだったのですけれども、それだけでは不十分だと思ひまして、もう少し積極的な意味でジェンダーを取り込みたいということがあり、今は先ほど申し上げたような、家事労働者の問題を正面に据えて研究を進めております。

地域に関して

最後に、地域が第2部のテーマの一つだと思いますので、簡単に触れます。私も、言語の習得というのは非常に重要だと思っていて、昨今の英語に一元化する傾向については、とても大きな問題があると思っております。やはりフィールドに出て、フィールドにいる人たちの話を直接聞く能力を高めることが、国際関係学であれ国際社会学であれ重要だというふうに思っています。ガヤトリ・スピヴァクが言っていることですが、語学は人文学、社会科学のインフラストラクチャーです。スピヴァクによれば、英語はハイウェイつまり高速道路で、現地の言葉を学ぶことは、県道などゆっくり歩く道で、人々の生活が目に入るためのインフラとして諸語があるので、それを学ぶということは、やはり社会科学や人文学をやる者にとっては、死活問題である。私もそう考えています。

ただ、地域という問題は、移住家事労働者の研究をしていると、2つの地域を同時に行ったり来たりするという事もあります。90年代と今とでだいぶ違いますのは、バーチャルな世界が広がっているということです。その中で地域が、テリトリアルな意味での地域とは違った位相を持つようになってきていると考えております。この点も国際社会学において、重要な課題になっているのではないかと考えています。

三砂 第1部の諸先生がご指導にあたられた4名の研究者の方にお話しいただきました。ここからは、多文化・国際協力量科、あるいは国際関係学量の教員をしている3名が話します。よろしくお願いいたします。

私は英文学量と国際関係学量の学科横断コースである多文化・国際協力コースが2003年にできたあと、コース担当教員として2004年に、国際関

係学量に赴任しました。ウェルネスの分野との合体、と、さきほど加納先生がおっしゃいましたが、私はその国際ウェルネスユニット担当として赴任したのです。このコースの卒業生は既に13期出ており、現在の4年生がコース14期生です。今年3月まで4年間、国際関係学量の主任をやらせていただきましたが、この4月からはこのコースが学量になりましたので、多文化・国際協力量科の主任をしています。また、この間、国際関係学研究量で博士の学生さんを4名担当しました。津田塾の国際関係学量の今、について、以上の視点でお話しさせていただきたいと思ひます。

まず、私の専門について話します。どのように津田塾大学独特のウェルネス、という分野が広がったのかというお話として聞いていただきたいと思います。その後、コースの話、学量の話、健康余暇の講座と国際ウェルネスのことについてお話しします。そして、国際関係学研究量で、私の担当する分野で博士論文を書いてきた方についてお話しさせていただきたいと思ひます。



三砂ちづる先生

私の専門は、公衆衛生・疫学・母子保健です。この分野において、いわゆる低所得国での格差の問題として考えていくのが、国際保健です。

私は2004年に国際関係学量に入りまして、多文化・国際協力コースの国際ウェルネスユニットを担当してきました。津田塾に来る前には、厚生労働省

の国立公衆衛生院疫学部で、日本の母子保健に関する仕事をしておりました。

2000 年までは約 15 年海外におりまして、約 10 年間ロンドン大学の衛生熱帯医学院の研究員をしておりました。その間 JICA の専門家として、ブラジルに約 10 年、イギリスに約 5 年住んでいましたので、地域としてはラテンアメリカに一番親和性がございます。その前は学生としてイギリスや沖縄におりました。沖縄には約 3 年間、琉球大学保健学研究科の大学院生として滞在しました。その前に約 1 年、ザンビアに青年海外協力隊として行き、若き日の小倉先生にお目にかかっております。

大学は京都薬科大学の薬学部で、こういう国際協力や開発の分野に関わりたくて、当時理論武装が足りないと思いましたので、卒業後、薬剤師をしながら神戸大学経済学部の夜間部に通いました。国際関係論という分野にも、そこで出会うことになります。

多文化・国際協力学科の設立

多文化・国際協力コースに関しては、2003 年に始まりまして、2004 年から実際に学生が入ってきました。現在の 2 年生、3 年生、4 年生は、国際関係学科と英語英文学科との横断コースの学生です。現在各学年約 48 名の学生がおります。加納先生をはじめとする国際関係学科の先生方がつくってくださった、オープン・リサーチ・センターに助けられながら、2004 年以降活動してきて、常に人気のあるコースとして存続してきました。

このコースでは、教員引率型ではなく学生に個別でフィールドワークをさせるということをやっております。国内外にかかわらず、一人一人のフィールドワークを私たち教員がスーパーバイズするという形です。これは国際関係学科の学生が、コースができる前から、自発的にやってきたことを引き継いでいるともいえます。

多文化・国際協力コースは、国際協力、多文化・言語教育、国際ウェルネスという 3 つのユニットから始まりまして、後に多文化共生というユニットが

加わり、現在は 4 ユニットあります。多文化・言語教育は、英文学科との学科横断コースであるということからつくられたユニットであったと言えます。

このコースは、自らテーマを決めてフィールドに赴き論文を書くという、問題関心から始まる、地域研究として国際関係学科で大切にされてきた方法論をつかいながら、フィールドにより特化した学科といえます。もともと国際関係学科の基礎的な科目に支えられてきたこともあり、勉強熱心さという意味でも、国際の学生を継ぐという雰囲気で作ってまいりました。

その多文化・国際協力コースが今年の 4 月から学科になりました。国際関係学科から 45 名の定員、英語英文学科から 25 名の定員を減らして、学生定員 70 名の学科を作り、教員 8 名でやっております。教員は、国際から 5 名が移り、新任が 3 名入っています。後ほど紹介させていただきたいと思います。フィールドワークを一層充実させるようなカリキュラムと教員を配置しています。

国際協力コース、多文化共生コース、国際ウェルネスコースという 3 つのコースがあります。フィールドワークを基にして 3 年間のゼミ活動を行うことをはじめとして、多文化・国際協力コースのほとんどの内容を継承しています。さらに第二外国語が 3 年生まで必修となっております。

まず、国際関係学科から移った教員を紹介させていただくと、ラテンアメリカ研究、人口論の三澤健宏先生。木村朗子先生は文学の先生ですが、震災後文学をやって、世界中を飛び回っておられる文学者です。木村真希子先生は、国際関係学科の伝統である国際社会学を継ぐ、インド研究者です。丸山淳子先生は文化人類学者として、若くて澁澤賞を受賞されている大変優秀なボツワナ、ブッシュマンの研究者で、アフリカ研究を担当しています。

そして、新任の先生、川端浩平先生は、多文化共生論、在日朝鮮人・韓国人の問題を非常に深く関わってやっておられる先生です。松山章子先生は、国際関係学科の卒業生ですから、同級生という方がいらっしゃるかもしれません。医療人類学の専

門で、国際保健の分野で活躍して、長崎大学で大学院を立ち上げられた方です。八塚春名先生もアフリカ研究者で、タンザニア研究の生態人類学者、理科系の農学部出身の、食の研究をやっていらっしゃる先生です。以上のようにアカデミックなフィールドワーカーがそろっています。

国際ウェルネスについて

次に、国際ウェルネスという私の関わっている分野についてお話しします。これは津田塾大学の健康余暇コースの伝統を引き継いでおります。2004 年より、国際関係学科と国際関係学研究科に、健康余暇の分野が、具体的には、健康教育、臨床心理学、体育、運動に関する分野や公衆衛生学などの分野の研究者が入ってきています。

続いて、私の担当させていただいた博士論文ですが、公衆衛生と母子保健の分野の 4 本です。

須藤茉衣子さんの『増える保育所と子どもの健康』。これは、東京 1 市の 12 の認可保育所の関する調査から成り立っており、今彼女は国立成育医療センターの研究員をしております。

松崎良美さんは、今は国際関係学科の助教なのですが、津田塾大学の学生に横断調査をして『女子大生のメンタルヘルス・スラングと首尾一貫感覚』という博士論文を書きました。

産育習俗という点で指導させていただいた松本亜紀さんの博士論文、『青ヶ島のタビゴヤと出産』は、先日藤原書店の河上肇賞を受賞しました。

最後に、今年博士論文を出した吉朝加奈さんの『妊娠期就業と低出生体重児分娩』。東京 3 市の大規模な横断調査を元にしてしています。吉朝さんは現在東邦大学看護学部にて勤めておられます。

大学院生は、公衆衛生・疫学の分野で専門的に学ぶとともに、国際関係学研究科の公衆衛生以外の分野の先生からのコメントや議論に耐える研究で論文を書くという事が求められます。私ども公衆衛生の分野では、しっかり調査さしていれば、数枚の論文で学位は取れるのですが、国際関係学研究科なので、相応のものを書いていただかなければなりません。それだけ大変な論文を書くということで、結

果として 4 名とも、国際関係学研究科の学際的な議論に大変鍛えられたと言って卒業していきました。

ということで、私自身と、この分野を学ぶ学生の存在というのは、国際関係学研究科の一つの広がりというふうに捉えていただければと思います。

柴田 国際関係学科の柴田と申します。私の研究テーマも、インクルーシブな学びやテクノロジーというところに設定していますので、見るからに「国際」という感じではありません。ただ、そうした中でも、私たちが現在行っている取り組みや研究は、ある程度は、国際関係学科のスピリットを受け継いでいるのではないかと考えています。そういった観点から、お話しさせていただきたいと思います。

現在私は、国際関係学科の教員を務めながらインクルーシブ教育支援室を担当しております。本学でも障害のある学生さんが 30 名を超え、かつ、小平の地域でも障害がある方々のさまざまな関わりやサポートが問題になっていっているということで、2015 年から設置させていただき、私が担当させていただいています。他にも国際関係学科の先生や、国際関係学研究科も含めて大学院生・学生が関わっています。

国際関係の学生や院生、教員は、現在の社会のフロンティアになるようなさまざまなテーマにとっても敏感に反応して、それに取り組んでいくというスピリットというものを、そもそも持っていて、かつ、そういうセンスもあるのではないかと思います。国際関係学科としては私たち「希少生物」ですので、先ほども「希少生物」好きの津田国際関係学科と言われていましたけれども、実際にそういったスピリットを結構受け継いでいるのではないかなと考えております。

インターナショナルに見ても、このテーマは国際的にも注目を浴びております。日本国内としても障害者の数は極めて増えておりますし、実際に障害がある学生さんもどんどん大学に入ってきている。だから本学もそうなっているわけです。まさに日本における課題を見ていこうという部分を体現している取り組みではないかと考えています。



柴田邦臣先生

本学での取り組み

これから先は、実際にさまざまな形で、本学で行っている取り組みについてお話しいたします。まずお見せしている写真は、ハワイ大学のこの分野での著名な研究者をお呼びして講演をさせていただいた時のものです。日本の課題を世界目線で測るという、先ほどの今泉先生のお話のスピリットを、まさに受け継いでいるといえます。さらにサインランゲージのスライドは、本学で、手話を実際に学んでいるイベントのものです。手話は、日本における、重要なマイノリティーの言語ですので、こういった観点で多様性のまなざしを磨くことができることも、今泉先生がおっしゃったこととつじじりと考えています。

次のスライドのイベントは、毎年津田塾祭内でやっているのですが、子どもたちがたくさん来てくれます。去年は、障害のある子どもたちも一緒に遊べるようなプレイグラウンドを作ろうということで、段ボールハウスを本学の学生さんが作ってくださったのですが、これも、小林先生がおっしゃった「地域に踏み出す学び」というものに、深く関わって学んでいくという魂をまさに引き継いでいると思います。

次のスライドでは、私の研究テーマでもあります、いわゆる EdTech、テクノロジーの教育上での応用についてお話しいたします。これを障害のある子どもたちが使っていくことによって、さまざまな形で学びというものを多様化できるという事です。私は研究テーマを自分のこととして問うべきであると考え、それを津田塾で根付かせたり、一緒にコラボレーションしたりしています。

さらにとても重要な事です、英語教育というものが研究のテーマになっております。後ろのほうのポスターにも英語教育の話が出ていますが、英語教育ばかりが席巻していくという現状をどう考えていくかということは、やはり国際関係学としてもとても重要です。こういった、「研究テーマを自分のこととして問う」（伊藤先生）「英語教育の問題」といった論点に、伊藤先生がご指摘されていた観点が活かされているのではないかなと思います。

次のスライドは、点字を教員と学生と一緒に頑張っているところです。本学でも点字を勉強する授業が、実は始まっているのです。点字に関しましては、津田塾の卒業生が大勢、関わってまして、点字で図やグラフを制作したりするものを、津田塾の卒業生の人たちがパイオニアとして貢献されています。私も点字は勉強中ですが、教えながら教師も学んでいます。小林先生の「教えながら（教師も）学ぶ」を地で行く感じです。

さらに面白い試みとして、目が見えない子どもたちが塗り絵をするということがあります。結構いろいろなところで注目を浴びていますが、おそらく日本で初めて行っていると思います。最初の一步を一緒に踏み出して、日本に根付かせていこうとしています。これも最初の一步を一緒に踏み出すという、小林先生がおっしゃっていた、国際関係学科の魂というものを体現していくのではないかなというふうに考えています。

これらはメディアに取り上げていただいたりしているのですが、現在さらに広がってまして、現在津田塾大学は、研究ブランディング事業という文科省の事業に採択をされております。その事業の中には、国際関係学科の人間が関わっているものが4つほどあります。

後ろのほうにさまざまなポスターがたくさん展示されていますが、ぜひ、この後終わってから、皆さんからコメント頂けると幸いです。国際関係学科のスピリットが、さらに若い人たちに広がりをもって体現していくことを実感していただければありがたいと考えております。

今更ながら私の自己紹介をさせていただきますと、2015年から2018年、大学院の国際関係学研究科を担当させていただいておりました。自分のテーマが国際らしくないので、大丈夫なのかなと思ったのですが、それでも、国際関係学科の大学院で勉強させていただいて、国際関係学科のスピリットみたいなものを体感することができたというふうに考えました。

これは学部教育としてもそうなのですが、津田の国際関係学科は、問題や課題の解決学としてどういう学びがあり得るのか、主体的に自分の視点でどういうふうに考えていくかということを能動的に考え、多様なテーマをマイノリティの観点から深く扱っています。そういった学科であるということを、痛感させていただきました。

大学院の講読で、百瀬先生の本を扱い、拝読致しました。ご高著では、主体的に発する問題意識ということを強く出されていました。また、現代世界に関する具体的な問題への主体的関心をみんなで共有し、それぞれ考えていこうとするということが指摘されています。現在でもやはり、そういった教育を目指してなされています。これこそが、私の報告で取り上げていた津田の国際関係学科のスピリットとも言えるかもしれませんし、かつ、先輩方が現在も体現されて、また、現在学ばれている学生の皆さん方が今体感されているものではないかと考えております。私たちもぜひ、そういったものを体現できるような協力を実践していきたいというふうに考えております。

インクルージョンといいますと、津田塾の国際関係学科でそういうことをやるというのは少し不思議だと言われることが、まああります。しかし実際には、さまざまなフロンティアを、津田塾の特に国際関係学科が切り開いているという意味で、深く通じます。また遡れば、津田仙や津田梅子先生、藤田たき先生が、日本のインクルージョンにおいて、先鋭的なリーダーシップを発揮されている伝統があります。

さらに、DPI 日本会議という、障害がある人たちの集まりとして最も日本でも力のある団体の現在の議長は、平野みどりさんという国際関係学科の出身の方です。こういったテーマに取り組んでいくということの

重要性もあると思いますし、現在、国際関係学、国際関係学科の学びがさらに広がって、さらに視点が多様になって、そしてさらに主体的に、さらに精緻に論理化されて発展していく、活動していく。そういった部分を引き継いでいければというふうに考えております。

朴 朴と申します。現在東アジア研究、国際関係概論、国際政治論などを教えております。よろしくお願いいたします。最後の発言者は時間を厳守することでしょう。言いたいことをだいが省略して申し上げることにします。

先ほど、国際政治論を教えていると申し上げました。高い専門性が問われる科目であるだけに、かなり肩の重荷を感じています。国際政治論のはじめての授業では、どのように国際政治論を学ぶかについてガイダンスするわけですが、私は学生らに配るレジュメに国際政治論の学び方として「津田塾大学学芸学部国際関係学科」と書いておきます。

色々な理解の方法があると思いますが、まず、「学芸」、すなわちペパルというのは、人間を自由にさせる技を習得することでもあります。だから学生たちには、一生懸命覚えることも大事だけれども、答えが多様であることを自覚し、それに不安に感じないように伝えています。そういった意味で、第1部の先生方々らのお話を聞いてこの教えが大きく間違いではなかったと、私なりに思いました。



朴正鎮先生

次に津田塾大学の「国際関係学科」ということで、主にアメリカ発の国際政治理論とは少し違う文脈で、また日本における国際関係学の草分けとしての津田塾大学がありました。その延長として、東アジア研究、中でも朝鮮研究の発信地としての長い歴史があり、だからこそ私がここにいられると思います。そういった意味で、私自身津田塾大学の韓国人教員として高いプライドを持っております。

皆さんご存知の通り、今年 7 月から日韓関係がほぼ底を打った状況です。その影響で、個人的には、津田塾大学という名前を掲げながら普段より忙しい日々を送りました。今週もソウルと新潟に行きまして、このシンポジウムに来る前に 3 つの国際会議に参加しました。日韓関係、そして北朝鮮核問題で発表をし、それから、今年が在日朝鮮人帰国問題 60 周年ということで講演を行いました。このように、仕事を圧縮的に行いますとそれなりにやりがいがあるのですが、今回はなぜかすっきりしない気持ちでした。

韓国に行けば、日本に対して何か悪口を言っほしいという空気が漂い、日本においても同じ雰囲気があります。加えて北朝鮮非核問題に関連しても、平和を求める韓国、北朝鮮への制裁論が目立つ日本です。全く異なる視線と言えます。その上に、帰国問題に関連した在日朝鮮人の人権問題をめぐって日本政府、または北朝鮮当局にその責任を求める激しい論争が展開しています。要は、どちらにいても怒りと憎しみが感じられるわけです。そこで、主催側の空気を読みながら発言せざるを得ない私を発見します。アカデミックな議論の場が失われ、落ち着いた分析と提言が出来るわけではありません。

世代に関して

そんな中で一つ、勇気づけられるある経験がありました。今年 7 月という、まさに日韓関係が最悪になったと言われていたその時期に、あえてソウルでゼミ合宿を行いました。3 年生と 4 年生 20 名程度で

す。テレビではほぼ毎日韓国バッシングが行われているわけですが、それなら韓国に直接行って、いわゆる「反日」の現場というものをみてみればいいと思いました。そして南北朝鮮の現状、北朝鮮非核化の問題も大きく揺れているところでした。そこで、できれば朝鮮半島分断の現実も実感してもらいたいということもありました。

ソウルで、学生らは日本では「反日」の象徴として言われている慰安婦像の前で集会している方々と話し合ったり、写真を撮ったりしました。それから青瓦台（大統領官邸）前の広場で行われていた大規模デモの現場を参観しました。そこでの学生らの感想は反日デモというよりは安倍政権に対する問題提起であったということです。また、その隣には日韓友好を唱える集会も同時に行われて、そこに参加している人たちと明るい雰囲気です話し合ったりする学生たちもいました。いずれも私からの勧めではなく、学生自らの行動です。私はその後、「板門店」付近を案内しました。そこは、実際の朝鮮半島の停戦の現場です。

このたびの日韓関係に対してはいろんな解釈があると思いますが、昔のような単なる歴史問題をめぐる対立のみならず、貿易戦争、そして安全保障をめぐる対立になっているということが大きな特徴といえます。ある意味、蒸し返されている対立の繰り返しではなく、過去とは異なる「喧嘩」になったと私は理解しています。言い換えると、お互いやってはいけないことをしたのではなくて、昔はできなかったことをやっているということです。これは日韓関係の構造そのものの変化しつつあるということを意味します。それも好ましくない方向へ。

だから私は今回のソウル合宿で何が起こり、それを通じて学生らが何を感じるだろうか、内心心配していたのも事実です。合宿の日程の中ではソウル大学の学生らと交流の場があり、それを韓国のメディアが取り上げたことがありました。『〇〇日報』という韓国の大手日刊紙の記事でしたが、それが日本のウェブ版になって、ヤフーニュースでも見られたことがありました。日本でも読まれたわけですね。しかし、その日本語

版記事には 3,000 以上の書き込みがあり、2,500 件以上がかなり批判的なものでした。韓国の教員が日本の学生を洗脳しているという話までありました。

これこそが日韓関係の現実でもあります。メディアに取り上げられることにはより慎重であるべきだったと個人的に反省し、今後学生たちとどのように話し合えばいいか、心配もしました。実際に記事への書き込みを見た時、学生たちの中には少々がっかりした様子がみえました。ところが、その次の日から、学生らは何もなかったかのような顔をし、楽しく合宿に臨んでいました。正直びっくりしました。そもそも今のようない日韓関係の中で韓国に行くこと自体、親たちから反対があったのも不思議ではありません。それを乗り越えた上に、目の前に 2,500 以上の悪口があったにもかかわらず平常心を保ち得るのです。いい意味での鈍感力というか、彼女らが持っていた底力を実感したところですよ。

私は、そこにはやはり世代の問題があると思い、注目しています。今の世代は我々の世代とは異なり、例えば日韓関係に限ると、「韓流ネイティブ世代」ともいわれています。つまり、上の世代が何を言おうと、自分の目で韓国、または日韓関係を見られるということです。自分の力で国際関係を体験できるわけです。そういった時代に生まれて、当たり前のように韓国の文化を楽しめて、自ラ行けるのです。このように、私はこのたび学生たちから新しく学んだことが多いわけです。

変わる時代においては、新しい世代、つまり今の津田塾大学の学生たちが、中でも女性が重要です。文化に対しての親和感もそうですけれども、なにより相手に対する先入観を持たないこと。そういった意味で、これから変わっていく東アジアや日韓関係など語る際に、できる限り私が持っている知識のみを押し付けないようにしようと決心しました。

皆さんも、若い世代に対して、ぜひこれからも応援してください。津田塾大学国際関係学科における、ここ最近の私の担当の教育の現場でした。

三砂 私も他の大学の教授と話をしている一番違うと思うのは、津田塾大学の職員と教員は学生の悪口を言わないということです。学生さんがよく勉強して、立派な方々なので、自分たちが一生懸命頑張らなきゃいけないという気持ちは、教員が共有しております。とりわけ、国際関係学科、多文化・国際協力学科の教員は、そうです。これはお世辞でも何でもなく、本当に学生さんがよく勉強しているので、私たちも、この人たちについていくために頑張らなくてはいけないと思っています。朴先生がおっしゃるように、次の世代の期待に応える教員になるべく努力したいと思います。

——どなたかご質問がありましたら、挙手をお願いいたします。コメント、ご意見、何でも結構です。
第 1 部の先生でも結構でございます。

A 女子大というものの一つの地域であり、一つの、もしかしたらまだマイノリティーであるかもしれないなど思ったのですが、女子大の今後をどのようにお考えになっていますか。

小林 自分自身の立ち位置から問題を捉えるという意識を深められるという意味で、女性の発言や活動が依然として制約されやすく、一般化されていない日本社会においては、やはり女性という立場から主体的に学び、議論する場というのは、まだまだ重要だと思います。

今泉 私は共学で教えていますけれども、なぜ、日本社会に女子大学が必要なのかということを考える上で、まだまだ必要ではないかというふうに私は思っています。

高橋 私も共学で教えてきたので、そこにいる女の子たちが、男女共学の間でいることで、ある種の価値観に拘束されているということとはとても感じます。そういう意味では女子大というのは、少しそこから切り離された、マイノリティーというよりは、ある種の恵まれた集団であるのかもしれない。

伊藤 同じ質問を昨日台湾の方から聞かれました。千駄ヶ谷キャンパスには、「Empowering Women

to Make a Difference」という文字が赤い看板に書かれています。まさにここに女子大の意義があり、この点は今後も変わらないのではないかと思います。

朴 先ほど紹介した韓国での合宿の経験、それは普遍的ではないと言われるかもしれませんが。だとすれば、私は津田塾大学の学生だからこそできたことだといえます。

柴田 自由さとセンスの良さというものを、女子大といいますか、津田塾大学の学生から強く感じます。ある意味プレッシャーといいますか、圧力というものに敏感に反応することができて、そういった学びを自ら獲得して社会に生かすことができるのです。

三砂 女子だけの大学というのは、今どき大いなるアナクロニズムで、女子大の存在意義というものは、突き詰めていくと、ないのではないかと感じてしまいます。しかし、津田塾大学というところで、女性だけの環境というのはこんなに楽しいことなのか、こんなに一人一人が楽しそうに自分の場所を見つけることができるのかという現状を見れば、創立者の思いと現状肯定、という意味で、女子大学は、まだ続けていくべきだという考えであります。

ご質問をどうもありがとうございました。今後も続いていく女子大学の国際関係学科ということで、第2部を締めたいと思います。

追記

この報告書は2019年12月15日、津田塾大学小平キャンパス(1111教室)にて開催された「国際関係学科設立50周年記念シンポジウム」をまとめたものである。シンポジウム開催にあたり、国際関係学科の有志が準備・運営を手伝ってくれた。学生スタッフは以下の通りである。(50音順)

井上 茉里香 (国際関係学科2年)

倉石 東那 (国際関係学科3年)

田中 陽香 (国際関係学科1年)

田中 奈津美 (国際関係学科4年)

橋本 紬季 (国際関係学科1年)

廣川 桜 (国際関係学科1年)

三好 紗理依 (国際関係学科2年)

【国際関係学科50周年記念事業委員会】(50音順)

北見 秀司 (津田塾大学学芸学部 国際関係学科 教授)

多賀 吉隆 (津田塾大学学芸学部 国際関係学科 教授)

三澤 健宏 (津田塾大学学芸学部 多文化・国際協力学科 教授)

水谷 明子 (津田塾大学 国際関係研究所 特任研究員)

山下 靖子 (津田塾大学 国際関係研究所 特任研究員)

編集・発行

2020 年 3 月 31 日

津田塾大学学芸学部 国際関係学科

〒187-8577 東京都小平市津田町 2-1-1

ホームページ <http://www.tsuda.ac.jp>

編集協力 田中 奈津美、橋本 紬季、廣川 桜